

D✿N
www.scu.ac.jp

札幌市立大学
教員研究紹介
2023

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科
芸術の森キャンパス:005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目
TEL. 011-592-2300

看護学部・看護学研究科・助産学専攻科
桑園キャンパス:060-0011 札幌市中央区北11条西13丁目
TEL. 011-726-2500



札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

札幌市立大学

教員研究紹介

2023

札幌市立大学はデザインと看護の2学部、2研究科、助産学専攻科を設置し、「人間重視」と「地域社会への貢献」を基本理念に掲げ、デザインと看護の特色を活かした教育・研究・社会貢献活動に取り組んでいます。本冊子は産学官金連携・地域連携等にさらに積極的に取り組むため、多くの方々に本学教員の研究事例を紹介することを目的に発行いたしました。札幌市立大学教員の研究活動に関心を持っていただければ幸いです。

1. デザイン学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
1	人間空間デザイン	教授	椎野 亜紀夫	身近な自然への気づきを促す連携教育の実践と検証	1
2	人間空間デザイン	教授	齊藤 雅也	地域の気候風土を活かす「住みこなし」の想像温度による診断	1
3	人間空間デザイン	教授	西川 忠	ひび割れが自然に塞がる自己治癒コンクリート	2
4	人間空間デザイン	准教授	大島 卓	敷地構成分析に基づいた動物園展示施設外領域の空間特性の解明	2
5	人間空間デザイン	准教授	片山 めぐみ	マルシェとこども地域通貨を活用したフリースクールのプログラムデザイン	3
6	人間空間デザイン	准教授	金子 晋也	地域資源に着目した建築デザインに関する研究・提案	3
7	人間空間デザイン	准教授	小林 重人	ゲーミングの力で自分たちが望む未来をつくる	4
8	人間空間デザイン	准教授	小宮 加容子	さわって楽しいあそびのデザインに関する研究	4
9	人間空間デザイン	准教授	武田 亘明	マルシェを「要」としてつながる～持続可能な地域発展と人材育成	5
10	人間空間デザイン	准教授	御手洗 洋蔵	街中菜園で健康的な都市空間をデザイン	5
11	人間空間デザイン	准教授	森 朋子	北海道における歴史・文化・自然を活かした都市デザインに関する研究	6
12	人間空間デザイン	准教授	山田 信博	集合住宅団地居住者と協同によるコミュニティ促進	6
13	人間空間デザイン	講師	石田 勝也	環境の変化を感じるためのメディアアート表現の可能性	7
14	人間空間デザイン	講師	須之内 元洋	ものがたり表現や文化継承のためのメディアデザイン	7
15	人間空間デザイン	助教	坪内 健	「コミュニティ主体の災害復旧とは？」 東日本大震災の集団移転における環境移行に関する研究	8
16	人間情報デザイン	教授	石井 雅博	人間特性の理解、およびそのデザイン応用	8
17	人間情報デザイン	教授	柿山 浩一郎	BtoB企業の製品評価に関する特徴抽出	9
18	人間情報デザイン	教授	藤木 淳	共創をもたらすメディアアート活動の実践	9
19	人間情報デザイン	教授	細谷 多聞	幼児期のこどもに触覚刺激を提供する玩具のデザイン	10
20	人間情報デザイン	教授	三谷 篤史	看護基礎技術教育のための食事介護シミュレーションモデルの開発	10
21	人間情報デザイン	教授	若林 尚樹	教材としてのペーパークラフトの活用と分析	11
22	人間情報デザイン	准教授	金 秀敬	知覚情報間の「干渉」に着眼した、認知要素及び構造解明	11
23	人間情報デザイン	准教授	張 浦華	セラミック作品制作と札幌軟石の焼成施釉実験	12
24	人間情報デザイン	准教授	横溝 賢	情感をのせて殴り書くレコーディング手法の実践研究	12
25	人間情報デザイン	講師	大淵 一博	授業協力から発展した地域貢献	13

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
26	人間情報デザイン	講師	福田 大年	まちもじハント：見立て観察と協創を連動させたアイデア生成学習プログラム	13
27	人間情報デザイン	講師	松永 康佑	四分円環体が連結した運動によるアニメシー知覚に関する研究	14
28	人間情報デザイン	助教	矢久保 空遥	マルチモーダル刺激に対応した感性評価アプリケーションの開発	14
29	人間情報デザイン	助教	吉田 彩乃	機械学習を用いたキリンの行動パターン調査	15
30	共通教育	教授	松井 美穂	アメリカ南部文学研究	15
31	共通教育	准教授	並木 翔太郎	子どもの観察行為と情報処理に関する研究	16
32	共通教育	准教授	丸山 洋平	壮年期の人口移動と単身化―単身化の卓越する東京都を対象として―	16

2. 看護学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
33	基礎看護学領域	教授	定廣 和香子	デザインと看護の連携による心電図学習教材（立体模型）の開発	17
34	基礎看護学領域	教授	樋之津 淳子	大学と医療施設の協働による看護師の遠隔会議システムを用いた継続教育の効果	17
35	基礎看護学領域	准教授	檜山 明子	転倒予防に関する研究	18
36	基礎看護学領域	講師	武富 貴久子	血圧測定聴覚トレーニング教材 - はじめての血圧測定3分クイズ -	18
37	基礎看護学領域	講師	三戸部 純子	薬剤情報のエラー識別の正確性と指差呼称の効果	19
38	基礎看護学領域	特任講師	山出 誓子	一般病棟における看護チーム活動に影響する要因	19
39	基礎看護学領域	助教	吉田 実和	看護師のチームアプローチに対する評価と転倒・転落予防の実践状況に対する評価の関連について	20
40	看護管理学領域	教授	佐藤 ひとみ	看護管理と看護情報学	20
41	看護管理学領域	講師	鬼塚 美玲	厳冬期地震災害時の災害看護活動に関する研究	21
42	看護管理学領域	講師	矢野 祐美子	看護管理者の継続学習支援	21
43	小児看護学領域	教授	松浦 和代	乳児虐待リスク予測システム（仮称）プロトタイプの開発	22
44	小児看護学領域	講師	牧田 靖子	乳幼児の「窒息・誤飲」事故の実態と事故予防対策	22
45	母性看護学領域	教授	荒木 奈緒	妊婦の羊水検査に関する意思決定の様相	23
46	母性看護学領域	講師	石引 かずみ	日本における母子と家族にとって安心・安全・快適なマタニティケアシステムの構築を目指して	23
47	母性看護学領域	講師	岡 園代	熟練した技の言語化	24

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
48	母性看護学領域	講師	黒田 紀子	NICUから退院する赤ちゃんのご家族がより笑顔になるために	24
49	母性看護学領域	講師	山本 真由美	看護実践能力を向上させるための「装着型産褥子宮モデル」の教材開発	25
50	母性看護学領域	助教	大友 舞	プレコンセプションケアに関する研究	25
51	母性看護学領域	助教	久保田 祥子	日本における「性的同意」の実態把握	26
52	成人看護学領域	教授	川村 三希子	①認知症高齢がん患者の痛みのマネジメントに対するコミュニケーション教育プログラムの開発 ②がんサバイバーのヘルスリテラシーに関する研究	26
53	成人看護学領域	教授	卯野木 健	重症患者の長期的な後遺症に関する研究	27
54	成人看護学領域	教授	小田 和美	生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な援助方法に関する研究	27
55	成人看護学領域	准教授	菅原 美樹	二次救急医療機関の救急外来看護師のコンピテンシー評価指標の開発	28
56	成人看護学領域	准教授	牧野 夏子	看護師に対する外傷看護教育に関する調査	28
57	成人看護学領域	講師	工藤 京子	これからの患者会のあり方を考え支える	29
58	成人看護学領域	助教	栗原 知己	集中治療室に入院する患者様の入院中から社会復帰までを支える看護を考える	29
59	成人看護学領域	助教	平山 憲吾	①高齢がん患者の薬物療法継続における意思決定に関する研究 ②がん薬物療法を受ける高齢患者を支える家族の支援に関する研究	30
60	老年看護学領域	教授	貝谷 敏子	高齢者の脆弱な皮膚に対する効率性の高いスキンケアマネジメント方法の構築	30
61	老年看護学領域	准教授	原井 美佳	寒冷地に暮らしてきた高齢者の健康についての研究に取り組んでいます	31
62	老年看護学領域	准教授	村松 真澄	人工知能を利用した高齢者の口腔アセスメントのスクリーニング構築の基礎研究	31
63	老年看護学領域	助教	西川 めぐみ	腎臓移植患者の移植および免疫抑制剤の服薬に対する認識と服薬遵守行動の関係	32
64	精神看護学領域	准教授	守村 洋	メンタルヘルスに関する研究	32
65	精神看護学領域	講師	伊東 健太郎	北海道の過疎地域における精神障害者を支援する際の困難	33
66	精神看護学領域	助教	渋谷 友紀	当事者参加型演習：リカバリーの視点で当事者を捉える	33
67	在宅看護学領域	教授	菊地 ひろみ	明日の在宅看護を担う新卒訪問ナース育成の取り組み	34
68	在宅看護学領域	准教授	高橋 奈美	住み慣れた自宅で自分らしい生活を継続するための支援システムの構築	34
69	在宅看護学領域	助教	坂本 結城	看護学における「生活」概念の明確化	35
70	地域看護学領域	教授	喜多 歳子	子どものいる貧困世帯に関する保健師の支援の質向上を目指して	35
71	地域看護学領域	准教授	本田 光	あらゆる世代における“地域とのつながり”	36

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
72	地域看護学領域	助教	市戸 優人	特別支援教育で活用可能な性教育教材の開発と有用性・有効性の検証	36
73	地域看護学領域	助教	近藤 圭子	地域在住高齢者の健康に関する研究	37
74	地域看護学領域	助教	田仲 里江	大規模災害時等の遺族ケアにおける保健師の役割	37

3. AITセンター

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
75	情報学	教授	高橋 尚人	2022年2月の札幌圏での大雪時のTwitterデータおよび人流データ分析	38

2023.4.1 現在

1. デザイン学部

椎野 亜紀夫

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

SHIINO Akio

キーワード：子ども、自然、連携教育、都市公園

身近な自然への気づきを促す連携教育の実践と検証

【研究の概要】

本学デザイン学部が立地する芸術の森地区において、近隣小学校と総合的な学習の時間を通じた連携授業を実施し、身近な自然への気づきを促す授業実践とその効果検証を試みた。

小学生児童が日常的に利用している都市公園のフィールド調査を通じ、公園内の樹木の種類やその判別方法、紅葉のメカニズム、香りの出る葉等について現地で実物を紹介しながらレクチャーを行った。公園内には自然林ゾーンがあり、森林内での種子の発芽の観察や、動物（エゾリス）による木の実の食痕を実物として観察することができた。

調査結果は公園を紹介するリーフレットとしてまとめた。制作物から文章・スケッチの要素を抽出・検証した結果、活動を通じて身近な生活空間における自然への気づき・再発見が促されていたことが確認できた。



齊藤 雅也

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

SAITO Masaya

キーワード：建築環境、想像温度、住みこなし、快適性

地域の気候風土を活かす「住みこなし」の想像温度による診断

【研究の概要】

「想像温度」は“いま、何℃であるか？”と住まい手が直感で想像する温度の情報です。これまでの研究によれば、想像温度は熱的な不快感・発汗などの生理・心理・行動と関係が強く、季節・地域特性をもつことが確認されています。

現在、想像温度のもつこれらの特性を活かして、地域の気候風土を活かす「住みこなし（熟し）」を支援する方法を開発しています。例えば、夏の熱中症・冬のヒートショックを、想像温度を予測して未然に防ぐことや、比較的過ごしやすいとされる春・秋の暮らしを愉しむ（味わう）術を、住まい手の「温度想像力」と「住みこなし」の関係から解き明かそうとしています。2022年9月には、日本建築学会編で「季節を味わう住みこなし術～ちょいケアで心地よいライフスタイルに大変身～（技報堂出版）」を編著者として関わり刊行しました。今後、各地域に増えていく環境に配慮した建築の住まい手を対象とした「住みこなし」の診断や学校での住環境教育の場での想像温度の活用を計画しています。



西川 忠

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

NISHIKAWA Tadashi

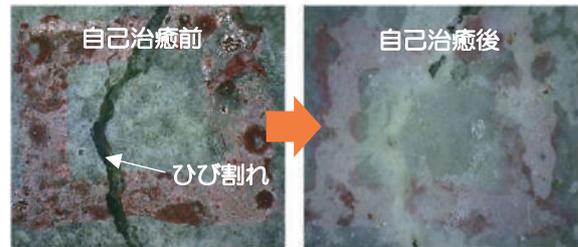
キーワード：コンクリート、臨床建築学、建築構造、長寿命化

ひび割れが自然に塞がる自己治癒コンクリート

【研究の概要】

コンクリートにひび割れはつきもので、発生を防ぐことは困難です。でも、ひび割れは鉄筋コンクリート造建築物の美観を悪くするだけでなく、雨水等が浸入することで内部鉄筋の腐食を招き、建物の耐久性低下につながります。ところが最近、人の傷が自然に治るように、コンクリートのひび割れが自然に塞がる「自己治癒コンクリート」が開発されました。ただ、ひび割れが塞がるためには水分が絶えず供給される必要があるため、現在適用されているのは、雨ざらしとなる土木構造物にほぼ限られています。

一方、建築物は部位によって水分の供給条件が異なります。本研究では、鉄筋コンクリート造建築物の部位別の曝露条件（水分供給条件）を想定して、自己治癒コンクリートの建築物に対する適用性を実験により検証しました。その結果、断続的にでも水分が供給される場合には、自己治癒効果が認められました。したがって、常時地下水に接している地下外壁や耐圧版はもちろん、屋上防水が劣化して、防水層と屋根スラブの間に雨水が回り込んだような場合にも、躯体コンクリートの自己治癒効果が期待でき、仮に防水層が破断しても室内側への漏水を食い止められる「フェールセーフ機能」を持たせることができると考えられます。



大島 卓

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

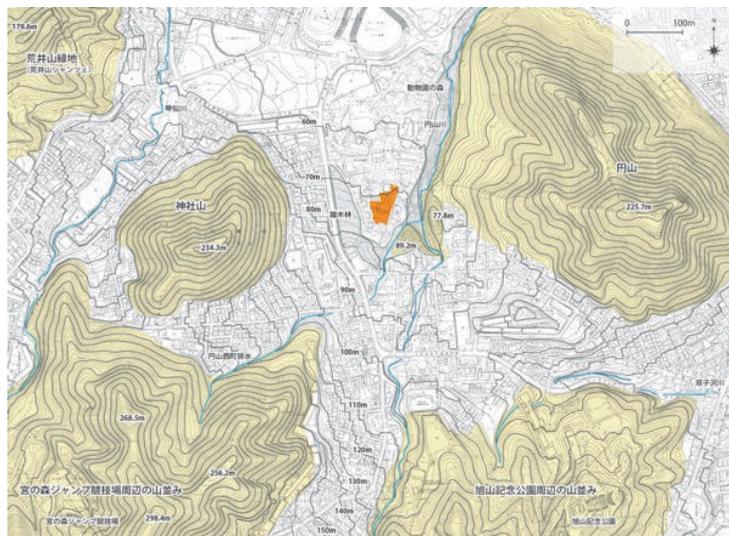
OSHIMA Makoto

キーワード：ランドスケープデザイン、牧場景観、地域再生、産業遺産の動態保全

敷地構成分析に基づいた動物園展示施設外領域の空間特性の解明

【研究の概要】

札幌市円山動物園で将来的な整備が検討されている「北海道ゾーン」予定地を対象に実地踏査を行い、敷地構成要素の抽出および分析を試みた。また、分析結果から動物園における展示施設外領域の空間特性について考察した。屋外放飼場をはじめとする動物園特有の施設形状がもたらす影響（眺望環境、境界相の強度変化）と、動物園内外の地形がもたらす視覚的連続性と囲繞性の形成が、空間特性の形成に大きく関与していることが示唆された。



片山 めぐみ

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KATAYAMA Megumi

キーワード：マルシェ、フリースクール、こども、通貨

マルシェとこども地域通貨を活用したフリースクールのプログラムデザイン

【研究の概要】

こども達がマルシェの活動を通して学生や地域の大人と感謝の気持ちを交換し、自己貢献意識・援助要請意識を高めることができるフリースクール等のプログラムをデザインした。また、感謝のメッセージを書き込むことができるデジタル通貨を構築、運用中である。マルシェが夏季開催のため、2023年3月現在はまだプログラムの効果測定はできていないが、フリースクールでは、頼まれたお手伝いだけでなく自ら商品企画をすることも出てきており、社会と繋がる効果が見え始めている。デジタル通貨構築については、今まで紙幣に手書きしていたコメントをタブレット PC とタッチペン使用でデジタル化し、個別にデジタル財布を作成した。想定通り運用の手間を省くことができ、出回っている通貨を一元的に管理しやすい一方で、タブレット PC でしかメッセージ入力できないため、こども達の通貨との関わりがフリースクールに来た時だけに限られてしまうことも分かった。今後は、通貨を紙幣にしてこども達に持たせた上で、紙幣の写メデータをシステム管理する方法も検討予定である。



金子 晋也

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KANEKO Shinya

キーワード：建築デザイン、木造建築、近現代建築

地域資源に着目した建築デザインに関する研究・提案

【研究の概要】

従来の学術的研究では評価の定まっていない建築事例や、地域に潜在する建築材料などに着目し、それらの調査を通じて建築デザインの提案を行ってきました。

近年では、北海道の昆布漁や鯨業の番屋を対象に、木造建築としての建築構法や生活空間の観点から研究しています。今後は、札幌市や小樽市などで、北海道の都心部にある戦後の建築（近現代建築）に関する調査・研究も行うことを計画しています。また、被災した地域における慰霊空間のあり方や文化的・生態的景観の視点から地域の歴史や文化から紐解き、構想計画のための資料を整理しています。これらの研究を通じて、現代の建築デザインの可能性について考えています。



写真1：近現代建築の現地調査



写真2：慰霊空間のあり方の研究

小林 重人

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KOBAYASHI Shigeto

キーワード：ソーシャルデザイン、進化経済学、複雑系科学、
社会シミュレーション、知識科学

ゲーミングの力で自分たちが望む未来をつくる

【研究の概要】

考え方や立場が異なる人たちが共通の知識基盤を形成して話し合うことができる「ゲーミング」と呼ばれるシミュレーションゲームの開発と運用を行っています。合意形成やシステムデザインのためのツールとして実際の現場で活用されています。

現在、スマホアプリを使用した疑似取引を行うことで、地域における産業連関を体験できるゲームを開発しています。アプリを通じてすべての取引を記録することによって、地域内でどのくらいのお金が循環しているのかを把握できる一方で、どのくらい地域の外にお金が流出しているのかも知ることができます。このゲームをプレイすることで、地域経済の仕組みがわかるだけでなく、ゲームにおける共通体験を踏まえて、今後の地域経済のあり方を議論するためのソーシャルデザインのツールにもなります。本ゲームのプレイを希望される学校や団体がありましたら、ご連絡ください。



小宮 加容子

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KOMIYA Kayoko

キーワード：キッズデザイン、ユニバーサルデザイン

さわって楽しいあそびのデザインに関する研究

【研究の概要】

これまでに実施してきたあそびの成果から、誰もが楽しむことができ、かつ、さまざまな「さわる」を経験できるあそび「びりびりわしゃわしゃ」を、2022年12月10日（土）、夕張市拠点複合施設「りすた」にて実施した。

当日は子どもから高齢者まで約30名が参加した。このあそびは、会場中央に吊るされたおはながみの帯を好きなだけ破り、床一面に敷いた不織布に貼り付け造形をするあそびである。貼り付ける際には噴霧器からの水を使う。おはながみを破ることで受ける刺激、造形のためにおはながみを丸めたり、広げたりすることで受ける刺激、おはながみを貼るために使う噴霧器からでる水の刺激など、参加者はあそびの中にあるさまざまな「さわる」を経験することができた。さらに、おかはがみで装飾された不織布を用い、高さ約2500mmのクリスマスツリーを作成した。これにより、あそびの後も引き続き、作品作りへの達成感やクリスマスに向けたワクワクする気持ちを促せたのではないかと考える。



武田 亘明

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

TAKEDA Nobuaki

キーワード：地域活性化、地域コミュニケーション、マルシェ、地域コミュニティ、生涯学習

マルシェを「要」としてつながる～持続可能な地域発展と人材育成

【研究の概要】

教育研究活動をとおして、地域活性化を目指す体制づくりと人材育成が始まっている。

全国の小中学校では、文部科学省の地域学校協働本部、学校運営協議会が置かれ、コミュニティスクール化が進められている。新学習指導要領の社会に開かれた教育課程では、児童生徒と教員が地域市民と連携し地域課題を発見・解決していくプロジェクト型学習に取り組む。大学では総務省の域学連携による積極的な地域活動により地域社会の活性化の役割を担おうとしている。

多様な市民と新しい公共空間、地域連携型教育の効果、地域連携型プロジェクトの役割について概観し、マルシェによる持続可能な地域発展について検討した。

実際に、芸術の森マルシェ八百カフェを企画運営した。実行委員会形式で地域市民団体朝市クラブ、学内学生団体八百カフェ実行委員会、札幌市と連携して、札幌市立大学芸術の森キャンパスを会場に2022年度は全8回実施した。参加者は150名から300名ほどで、地域市民間、学生間、大学や学生と地域市民の交流を活性化することができた。

2023年度も継続して全8回実施する予定である。



御手洗 洋蔵

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

MITARAI Yozo

キーワード：緑の健康効果、都市園芸、コミュニティガーデン

街中菜園で健康的な都市空間をデザイン

【研究の概要】

現代の社会において、仕事や学校、日常生活のさまざまな場面でストレスや閉塞感を抱えている人が増えています。そんな日々のストレスを少しでも解消すべく、街中での菜園活動を通じて、健康的な都市空間をデザインする研究をしています。

街中菜園とは、いわゆる貸農園や市民農園といわれるものです。菜園活動では、農作物の栽培を通じて癒しや気分転換など、心のリフレッシュにつながるだけでなく、適度な運動となり身体の健康維持にも役立ちます。また、収穫した農作物を隣の区画の人々と交換したり、ちょっとした収穫祭を開催することで、コミュニティ形成の一助としても期待されています。そんな人々の健康増進につながる街中菜園を増やすべく、実施者や関係者の方々へのアンケートやヒヤリングを通じて、その整備に必要な情報やアイデアを収集し、街づくりにいかす研究をしています。



森 朋子

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

MORI Tomoko

キーワード：都市デザイン、歴史的環境保全、文化的景観、都市形成史

北海道における歴史・文化・自然を活かした都市デザインに関する研究

【研究の概要】

本学に着任して5年が経ち、混沌とした都市を制御しなければ・・・との視点から専門とする都市計画・都市景観を捉えていたのですが、大自然に予め計画して開拓された北海道で都市計画を教えるのなら、都市計画そのものに対する見方を変えてみる必要があることにより気づき始めました。平野部では農業生産を基軸とした土地利用が見られ、山間部では国立公園をはじめとする大自然が残り、都市部では札幌に見られる中心市街地の再開発、それと同時に見える周縁部の衰退、郊外部・地方都市の人口減少の歯止めが効かず課題も散見されます。何か一つというよりも、北海道全体として広域に物事を捉えた上で部分を議論する、このバランスが大切だと感じています。

最近では、2012年より固定価格買取制度が開始され太陽光発電の普及が北海道内でも進む一方、各地で生活環境や自然・景観等に配慮すべきとの声が上がってきています。再生可能エネルギーの普及と生活環境や自然・景観保全、どちらも大切な課題であり、折り合いをつける必要がありますが難しい問題です。日本建築学会景観小委員会の活動を通し、各自治体の施策や実態を踏まえ、北海道等への政策提言等を目標に、調査研究を進めています。



写真 長沼町における太陽光発電施設の一例

山田 信博

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

YAMADA Nobuhiro

キーワード：団地、居住者支援、コミュニティ促進

集合住宅団地居住者と協同によるコミュニティ促進

【研究の概要】

一般的に高齢化率が高く、高経年が経過した集合住宅団地では、住民同士の交流が乏しくなる傾向にある。特にここ数年のコロナウィルスの影響もあり、他者との交流や行事などの機会が減少している。そこで、札幌市内の集合住宅団地を対象として、居住者の皆さんと協同し、コミュニティを促進する機会を設けた。居住者同士に加えて、団地周辺地域にお住まいの方々との交流も心がけた。

2022年9月に実施し、多くの方々に参加して頂いた。参加者の属性は団地内では、75歳以上の方が半数を占め、団地外では、39歳以下の方が半数を占めた。団地内外の多世代による交流が創出できたため、今後は継続して実施する予定である。アンケートも実施し有効性の検証も行う予定である。

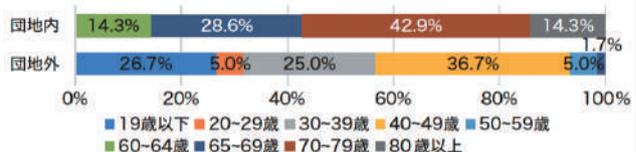


図1 年齢

石田 勝也

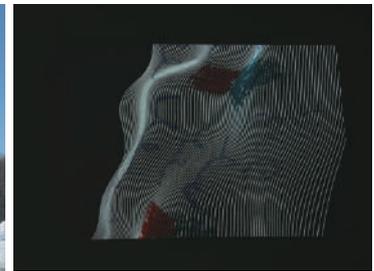
ISHIDA Katsuya

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

キーワード：環境情報、メディアアート、アートエンジニアリング、空間演出

環境の変化を感じるためのメディアアート表現の可能性

【研究の概要】毎年のように起こる大規模な気象災害はこれまでの経験値を遥かに上回る被害を出している。このように地球規模での環境変化が叫ばれているにも関わらず、人々の生活環境はそれらの自然とはかけ離れた都市生活を送っている。ここには自然と都市の環境の乖離という大きな問題があると考えられる。まず、地球環境を考える際、環境が変化する要因として大気の流動が大きな要因として考えられる。そして、その流動は人の存在が及ばない環境でも起こっている。そこで、自身が取り組んでいるメディアアートという表現活動と地球環境の変化を組み合わせた取り組みをこれまで高高度、寒地環境、深水域と行ってきた。2022年度は改めて大気の流動現象に注目し、風の変化を映像と音響に変化させる作品作りに取り組んだ。作品では本学周辺の4地点に風速計を設置し、そこから得られる風の情報（風速・風向）をリアルタイムに取得した。そして取得した情報をもとに音と映像を生成し、環境の変化を日常的な空間でも体感可能なものとして創出した。



作品映像 https://www.youtube.com/watch?v=chWTKZf_e70

須之内 元洋

SUNOUCHI Motohiro

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

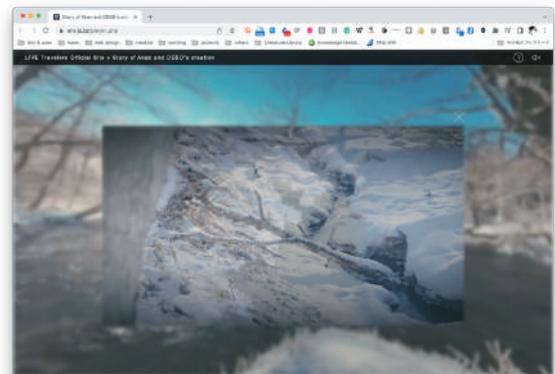
キーワード：メディア・アーツ、アーカイブ情報学、メディアデザイン、知覚情報学

ものがたり表現や文化継承のためのメディアデザイン

【研究の概要】

ものがたり表現や文化継承のためのメディアのデザイン、記録や表現を支える技芸の開発を行っています。例えば、近年手軽に撮影が可能となった全天球映像を活用し、映像、音響、3Dデータを柔軟に組み合わせて、ブラウザ向けの物語コンテンツを簡単に構築できる仕組みを開発している。

この仕組みを実践的に応用し、映像作家の北川陽稔氏と共同で、アイヌ文化紹介コンテンツを制作・公開しました（右図）。その他、日本各地で展開されるアートプロジェクトの活動や営みを記録し、共有・伝達していくためのデジタル・アーカイブや、日本を代表する現代美術キュレーターの仕事をデータベース化し、共有・利活用を促進するデジタルアーカイブの設計・デザインを進めています。



坪内 健

助教 デザイン学部（人間空間デザインコース）

TSUBOUCHI Ken

キーワード：コミュニティ移転、災害復旧、環境移行、東日本大震災

「コミュニティ主体の災害復旧とは？」 東日本大震災の集団移転における環境移行に関する研究



【研究の概要】

東日本大震災では、津波被害に伴い高台へのコミュニティ移転が復興事業によって実施された。政府は復興において地域のコミュニティを主体とすることを原則としたが、居住者と居住地の再編を伴うコミュニティ移転において、地域のコミュニティ主体の復興とは何を指すのか？



気仙沼市小泉地区では、被災直後から住民主導による集団移転の取り組みが注目を浴び、102戸の集団移転地が実現した。長期に渡る地区へのフィールドワークを行いながら、新たな環境に対する地区の主体性を涵養する災害復旧のあり方と、災害前から人口減少と過疎化に直面する被災コミュニティの持続性を向上させる集団移転計画の研究を進めている。

石井 雅博

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

ISHII Masahiro

キーワード：実験心理学、人間工学、認知工学、情報工学、ICT活用

人間特性の理解、およびそのデザイン応用

【研究の概要】

モノやことなどの人工物をより良くするには、まず、使い手であり受け手である「人間」を正しく理解し、デザインする必要があります。人間は複雑で、判明していないことが多いです。たとえば、何かをデザインする上での多くの経験則が存在していますが、その根拠が示されていなかったり、効果や再現性があいまいな例も少なくありません。これではよい人工物を作ることはできません。このような考えに基づいて、2つの視点で研究を行っています。

1つは人間の特性を明らかにする研究です。人間の知覚・認知および行動の機序を解き明かすために、実験的方法を用いて心や心理過程を理解しようとしています。これは認知科学や知覚心理学、運動心理学などの基礎になるものです。

もう1つは、働きやすい職場、生活しやすい環境、楽しくなるモノやこと、使いやすい道具などの設計にこれらの知見を応用する研究です。特に情報工学やICTを活用して、新たなモノやことを提案する研究を行っています。札幌らしい、あるいは北海道らしいテーマに挑戦していきたいと考えています。

柿山 浩一郎

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

KAKIYAMA Koichiro

キーワード：製品評価、BtoB 企業、評価手法検討

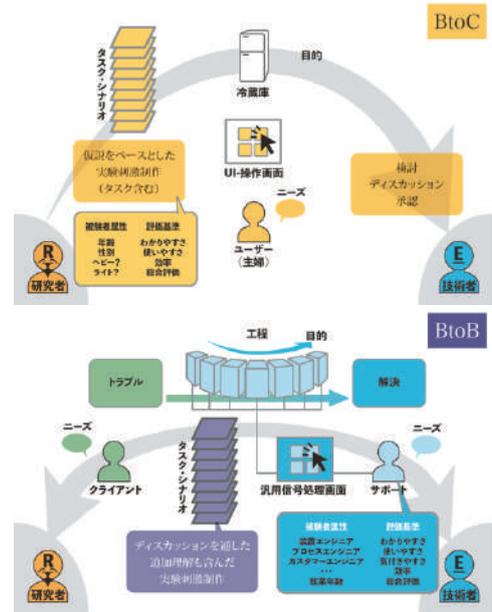
BtoB 企業の製品評価に関する特徴抽出

【研究の概要】

製品の評価研究においては BtoC（Business to Consumer）企業が製造開発を行うモノやコトを対象とすることが多いが、市場規模の観点で言えば BtoB

（Business to Business）といった企業間取引の額が圧倒的に多い。そこで、BtoC 企業が扱うモノやコトの評価と、BtoB 企業が扱うモノやコトの評価とでは、重要視すべき観点が違うとの仮説に基づき、BtoB 企業の製品インタフェースのユーザビリティ評価を実践的に行う試みの記録を対象に、比較考察を行った。

結果、「研究者と BtoB 企業のスタッフが、多くの時間を費やして実験刺激の共同制作を行うことで深い理解に至るコミュニケーションが重要」、「BtoB 企業の製品は効率や正確性を追求するものであること、専門性の高いユーザーが利用するものであることを想定した評価を設計することが重要」の2点を仮説として得た。



藤木 淳

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

FUJIKI Jun

キーワード：メディアアート、共創、地域、こども

共創をもたらすメディアアート活動の実践

【研究の概要】

地域の小学生を対象に、共創をもたらすメディアアートの授業やワークショップを実践しています。本活動では、「探す」行為と一人一人が全体の「部分」となる単位に着目しています。「探す」行為と「部分」単位に基づく体験から、自身を知り、他者との関係を知り、そして、自身を修正するという循環作用から自発的に目的に向かう共創が生まれる展開を狙いとしています。

具体例として、全員が「点」となってキャラクターのシルエットの形成を目指す作品では、自分がどの点か発見することは難しいようでしたが、それぞれが声を掛け合い全員が周囲の様子を窺いながら移動していく様子から全体が一つの共同体のようにそれぞれが連動する状況が確認されました。このようにそれぞれの体験者が自分を探しつつ、部分として全体の形成を目指す体験により、自身と他者との関係が深まることが期待できます。



細谷 多聞

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

HOSOYA Tamon

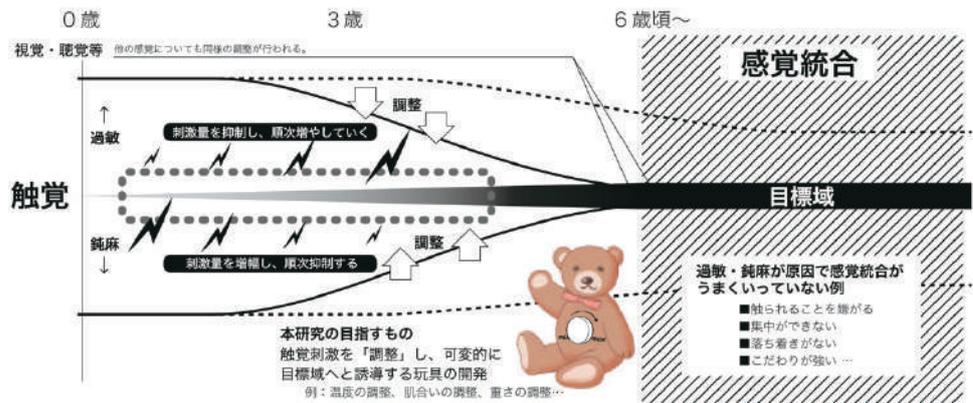
キーワード：触感覚、感覚統合、キッズデザイン、ものづくり

幼児期のこどもに触覚刺激を提供する玩具のデザイン

【研究の概要】

本研究では、子どもの発育に「触覚」が極めて重要な役割を有することに着目しています。人間の触覚は感覚統合の修練に大きく関わっていることがわかっているものの、幼児期の子どもがどの程度の触覚刺激の判別ができて、その判別がいかなる発達を遂げているかはわかっていません。そこで本研究では、触覚刺激の判別に焦点をあて、その能力が成長とともにどのように変化していくかを明らかにしようとしています。

将来的には、子どもに可変的な触刺激を与え、それがあそびにつながるような玩具の製品開発を目指しています。



三谷 篤史

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

MITANI Atsushi

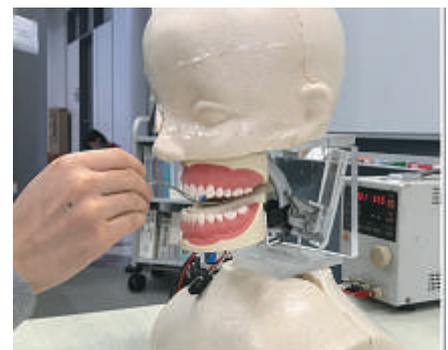
キーワード：メカトロニクス、センシング、ロボティクス、シミュレータ開発、インタラクション

看護基礎技術教育のための食事介護シミュレーションモデルの開発

【研究の概要】

医療や看護・介護における学習者・新人従事者の教育プロセスとして、シミュレーション教育が注目を浴びています。シミュレーション教育は、患者や患部を模したシミュレーションモデルを活用して、ケアの手順や基礎的手技を学習する教育プロセスであり、アメリカなどでは臨地実習に赴く前に必ず受講することが求められています。本研究では、このシミュレーション教育の重要性に着目し、口腔ケアに関する基礎技術学習を可能にする口腔ケアシミュレーションモデルを開発しています。人生100年時代において、口腔の健康は最重要項目であり、特に「食べる」ことは生命や健康の維持に必須であるだけでなく、「食べる」行為自体が日々の楽しみに繋がるため、その充実がQOLに大きく寄与します。口腔機能の衰えた高齢者に適切な食事環境を提供するのが食事介護です。

このシミュレーションモデルは、食事介護における正しいスプーンの動かし方を学習することが目的です。まだまだ開発途中ですが、より良いものになるように、看護学部の先生や歯学の先生、現場の専門職従事者や時には患者さんと共に研究を推進しています。



若林 尚樹

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

WAKABAYASHI Naoki キーワード：ペーパークラフト、ワークショップ、印象評価

教材としてのペーパークラフトの活用と分析

【研究の概要】

工作をともなう体験プログラムにおける、教材としてのペーパークラフトの設計手法を開発し、それによって設計した教材を活用した体験プログラムを提案することを目的に研究をしています。博物館や動物園・水族館などの展示施設で実施されている「ものづくり」を教材としたワークショップのプロセスでは、参加者の個人的な体験とともに一緒に参加する他者との関わりといった社会的な環境の中での他者との対話の中から自分の考えについてのさまざまな視点を学ぶダイナミックなプロセスによって、さまざまな効果が期待されます。このようなプロセスを、札幌市円山動物園での小学生向けのワークショップで活用するとともに、小学校の総合的な学習の時間での探求的な学習においても活用した授業を実施し、気持温度計による主観的な印象の変化をもとにした評価と分析によって、より効果的なプログラムの開発を目指しています。これまでに札幌市円山動物園で「ソウのはなしをきこう」「モルもっと知ろう」の2回のワークショップを行うとともに、市内2校の小学校では「どんな学校にしていきたいかな」と「一年の思い出」をテーマに、校舎のペーパークラフトを使った4年生の総合的な学習の時間での授業を行いました。



金 秀敬

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

KIM SuKyoung

キーワード：エモーション（Emotions）、マルチモダリティ（Multimodality）、エクスペリエンスデザイン（Experience Design）

知覚情報間の「干渉」に着眼した、認知要素及び構造解明

【研究の概要】

「干渉」と「認知」との関連性究明による創造力向上教育モデル提案を目的とした3つの研究

- 1) マルチモーダル知覚に着眼した「干渉」研究：科研費研究の研究活動スタート支援研究で実証・提案した評価モデルの高度化を目的とし、感覚器「間」の情報一致可否のみならず、感覚器「内」の情報一致可否および「親近感」が、例えば感性価値の強化あるいは緩和につながるのか、また強化や緩和が評価にどのように影響を与えるか(=干渉するか)について究明し、創造力向上教育モデル提案を目指す実証研究。
- 2) 空間に於ける「干渉」に関する研究：空間を構成する高さや広さなどによる知覚が、嗅覚のような「干渉」情報によってどのように変化するかを究明し、想像力を向上させる空間デザイン提案を目的とする研究。
- 3) カタチの認知相違に着目した「干渉」によるデザイン指標提案に関する研究：カタチの認知相違(=カタチで認識するか、文字で認識するか)に着眼し、異なる言語圏の被験者を対象とした比較研究を通し、カタチの認識相違の原因と結果の関係性について究明することで、デザイン指標提案、並びに、多層的観点からの観察力に必要な教育モデルの提案を目指す実証研究。

張 浦華

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

ZHANG Puhua

キーワード：札幌軟石焼成、札幌軟石施釉、セラミックデザイン

セラミック作品制作と札幌軟石の焼成施釉実験

【研究の概要】

研究1.「セラミック作品の高い完成度と存在感ある作品作りを目指した。その研究結果が認められ、「現在形の陶芸 萩大賞展VI」（2023.1.2-2.26）の応募作品が評価され、佳作賞を受賞した。“小さい作品でありながら、大きな作品の中で、補色効果による際立つ圧倒的な作品の存在感と人を惹きつける新しい表現を備えた作品”（審査員講評より）。

研究2.「札幌軟石と、セラミックの特徴を複合化した“焼成札幌軟石”等の基礎研究」では、a.焼成温度の範囲と軟石自体の状態変化（大きさや溶縮効果など）の実験データが得られた。b.軟石の焼成温度範囲に適した釉薬の種類、焼成温度範囲の実験データが得られた。c.札幌軟石のサイズと釉薬に適した焼成温度を割り出し、札幌軟石による抹茶茶碗の制作を行った。下記は、札幌軟石の原石を削り出した後施釉して焼成した茶碗である。



一人静（佳作賞受賞）



軟石焼成テストピース



札幌軟石原石 1230℃焼成



1050℃/5h 焼成



1000℃/5h 焼成



950℃/5h 焼成



900℃/5h 焼成



横溝 賢

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

YOKOMIZO Ken

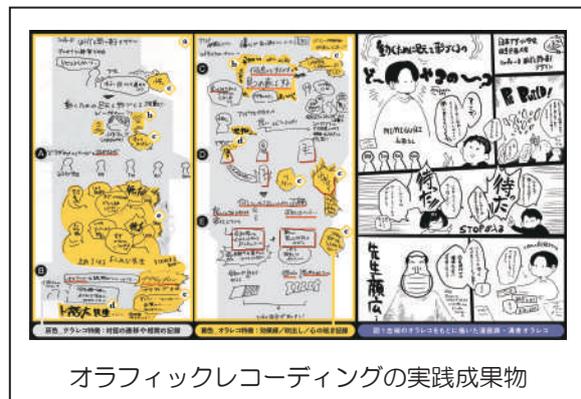
キーワード：共創、グラフィックレコーディング、組織デザイン、イノベーション

情感をのせて殴り書くレコーディング手法の実践研究

【研究の概要】

多様なスペシャリストと協力して、イノベーションを生み出す機会が増えています。多角的な視点で展開する議論は時にゴールが見えなくなりますが、グラフィックレコーディング（GR）は、参加者間の議論を絵と言葉を使って視覚化する記録手法です。絵で構成するGRは、その場を臨場感豊かに描けるメリットがありますが、結論までの情報構成が捉えにくく、振り返りには向いていないと指摘されていました。

そこで本研究では、議論をGRで記録しながらも、記録者の心の呟きをその場で殴り描いて挿入するオラフィックレコーディングという記録手法（オラは伊語で「今」）を考案し、行政や学会の会議で実してみました。その結果、この手法には、参加者に議論の鮮烈な回想と内省をもたらし、参加者間の協働的な理解を促す効果があることがわかりました。



オラフィックレコーディングの実践成果物

大淵 一博

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

OHBUCHI Kazuhiro

キーワード：地域貢献、産学官連携、学生参加

授業協力から発展した地域貢献

【研究の概要】

本学は地域貢献を使命とし、教職員・学生が一体となって様々な形で地域と関わりを持っていきます。2022年度は以下のような取り組みを通して、地域に貢献しました。

2年次開講のデザイン総合実習1では、南区地域振興課の職員のみなさまに授業に参加いただきました。「南区のブランディング」をテーマとしたこの授業では、最初に学生が職員の方々にヒアリングをするなど、南区に対する理解を深め授業課題に取り組みました。課題で制作したものから、職員の審査を経て、南区の啓発品をデザインし、南区が主催するイベント等に参加された市民の皆様へ無料で配布しました。また、南区内各地で開催されている冬のイベント「南区冬の雪あかり2023」を告知するフライヤーや、広報さっぽろ南区版ページのヘッダデザインを手掛けました。これらの事業を通じて、「芸術という切り口で南区をPRする」という南区の活動趣旨のもと、デザイン・アートのつながりを市民の皆様へ伝えていくことができたと思います。

学生が授業課題をこなすだけでなく、学外の方々との取り組みにも参加することで、多くの社会経験を積むことができるという教育的な効果も得られています。



福田 大年

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

FUKUDA Hirotooshi

キーワード：見立て観察、協創、デザイン教育、質的研究

まちもじハント：見立て観察と協創を連動させたアイデア生成学習プログラム

【研究の概要】

私は、市民のみなさんが多様な考え方を尊重しながら協働的に創造活動する「協創」が、これからの時代は大切だと考えています。今回紹介する研究は、デザイン初学者の創造力向上を目指して、見立て観察と協創を連動させたアイデア生成経験学習プログラム「まちもじハント」です。「まちもじハント」は、野外の風景から平仮名を見立てて採集する「見立て観察」と、観察結果を他の参加者と見せ合い、互いの視点の違いを協創的に学ぶ「発表会」を繰り返す学習プログラムです。



図：「まちもじ」の作例と「発表会」の様子

2022年度は、参加学生らが採集した「まちもじ」を分析しました。その結果、「まちもじハント」は観察と協創を繰り返すことで、既存の要素の見方・考え方を变化させる工夫が自然と学べる過程であることが分かりました。今後は、市民向けワークショップへの展開を検討しています。

松永 康佑

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

MATSUNAGA Kosuke

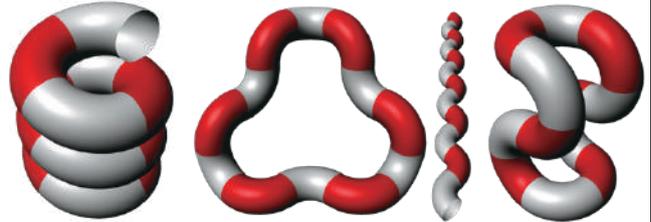
キーワード：コンピュータグラフィックス、仮想身体、インタラクティブアート、ゲーム

四分円環体が連結した運動によるアニメシー知覚に関する研究

【研究の概要】

円環体を4等分した四分円環体を複数用いて、これらをモータで連結し、様々な動きや造形を試行する。その動かし方によっては、意志のある生物のように感じ、アニメシー知覚が生じたり、工業製品的、数理造形的な認識が生じたりする。

本研究では、連結した6つの四分円環体を用いて、どのような動かし方の際に、アニメシー知覚がどの程度感じられるか、実際の試作を用いた実験を通じて考察する。



矢久保 空遙

助教 デザイン学部（人間情報デザインコース）

YAKUBO Takanobu

キーワード：感性評価、マルチモーダル、アプリケーション

マルチモーダル刺激に対応した感性評価アプリケーションの開発

【研究の概要】

人がモノやコトに対してどのような感性的な印象を抱くのかを調査することを感性評価実験と呼びます。感性評価実験をする際、通常は単一の刺激(視覚・聴覚・触覚など)を対象として行うのですが、昨今のVR技術の発展などに伴って複数の感覚を同時に提示した時にどのような感性的な印象を抱くのかという研究が活発になされるようになりました。複数の感覚に対する刺激をマルチモーダル刺激と呼びますが、マルチモーダル刺激を実験の中で提示しようとした時、複数の刺激を用意したり、刺激の組み合わせを検討したり、評価用紙を作成したりなど実験準備が比較的煩雑に

ります。そこで、我々はマルチモーダル刺激を提示することを前提とした感性評価用のアプリケーションを開発することにより、マルチモーダル刺激を用いた感性評価をより効率的に実施できるようにしようと試みました。

そこで、我々はマルチモーダル刺激を提示することを前提とした感性評価用のアプリケーションを開発することにより、マルチモーダル刺激を用いた感性評価をより効率的に実施できるようにしようと試みました。



▲ 評価アプリケーションの管理画面

吉田 彩乃

助教 デザイン学部（人間情報デザインコース）

YOSHIDA Ayano

キーワード：動物園、キリン、機械学習、軌跡、滞在時間の割合

機械学習を用いたキリンの行動パターン調査

【研究の概要】

円山動物園のキリン（テンスケ、オス、6歳）を調査対象とし、2022年9月3日（薄曇り）、2022年9月9日（快晴）の2日間の円山動物園キリン舎に設置されているキリン観察用定点カメラの録画映像を使用し、機械学習によって、野外放飼エリアにおけるキリンの①移動の軌跡、②どの場所で多くを過ごしているか、③滞在場所の日陰・曇・日向の滞在時間割合をそれぞれ算出した。①の結果、9/9（快晴）では、9/3（薄曇り）の日に比べ、画面手前の建物（キリン舎）の影になる場所に多くの時間滞在していたことが確認できた。また、③では、明度を使用し日陰・日向・曇の場所におけるそれぞれの滞在時間の割合を調べたところ、快晴日（9/9）の日陰にいた割合は、薄曇り日（9/3）に比べて約2倍（約24%に対する約42%）になることがわかった。これらの結果を目視による行動分析結果と比較したところ、同様の傾向を示す結果となっていたことから、機械学習を使用し算出しても正当性が保たれると考えている。



上：9月3日（薄曇り）の軌跡

下：9月9日（快晴）の軌跡

松井 美穂

教授 デザイン学部（共通教育）

MATSUI Miho

キーワード：アメリカ南部文学、人種、ジェンダー・セクシュアリティ、モダニズム

アメリカ南部文学研究

【研究の概要】

アメリカ南部文学、特に南部ルネサンス期（1920～50年代）の文学を中心に研究しています。作家としては、ノーベル賞作家でもあるウィリアム・フォークナー、女性作家ユードラ・ウェルティ、カーソン・マッカーズ、フラナリー・オコナーなどを研究しています。

南部社会は家父長制と人種差別を基盤とした社会であり、人種、ジェンダー、セクシュアリティといった要素が社会システム自体のみならず、その社会の個々人のアイデンティティと深く関わっています。そのような歴史的・社会的・文化的背景をもった南部の作家がどのように「南部とは何か」ということを、その文学的営為において探求したのかを考察することが研究の目的です。

具体的には、南部文学の特徴であるゴシック性、グロテスク性に焦点をあてながら、そのような表現形式の持つ意味を考えています。また、文学のみならず、アメリカ南部の音楽にも関心を持っています。

並木 翔太郎

准教授 デザイン学部（共通教育）

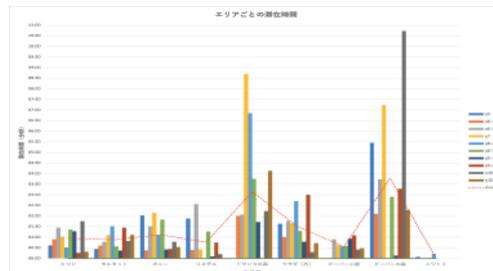
NAMIKI Shotaro

キーワード：子ども、動物園、観察、会話、情報処理

子どもの観察行為と情報処理に関する研究

【研究の概要】

動物とのふれあいによる情操教育は、大きな教育効果が期待できる一方で、動物への負担が大きく(Hunt & Powell 2013)、環境改善による飼育動物の福祉向上が求められている。本研究では、アイトラッカーを使用し、札幌円山動物園の「こども動物園」の利用実態に関する客観的データを収集することで、主たる利用者である子どもの①滞在時間、②散策ルート、③視線の動き、④凝視ポイントと、⑤保護者の行動（散策時における子どもとの位置関係、子どもの凝視時における振る舞い）を明らかにした。これにより、利用者と動物とのふれあいの実態を把握することが可能になり、飼育動物の福祉向上のための適切なふれあいについて検討を進められるようになった。



丸山 洋平

准教授 デザイン学部（共通教育）

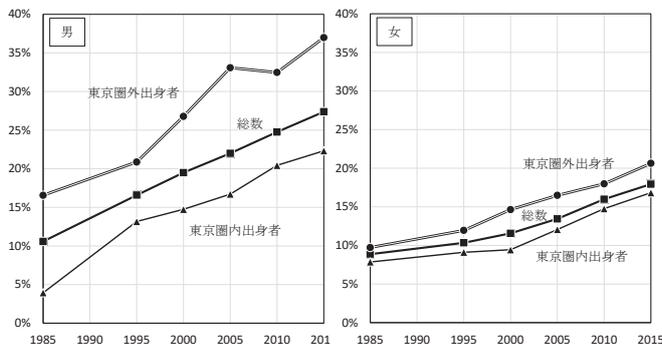
MARUYAMA Yohei

キーワード：人口移動、単身化、家族形成、壮年期

壮年期の人口移動と単身化 -単身化の卓越する東京都を対象として-

【研究の概要】

日本全体で単身化が進行しており、従来ならば自分の家族を持っていることを当然視できていた壮年期においても見られる。転入超過の大きい東京都において特に単身化が卓越していることから、年齢別人口に占める単身者の割合を単身者率とし、その出身地による違いを分析することで人口移動と単身化の関係を明らかにすることを試みた。出身地別割合は国立社会保障・人口問題研究所の人口移動調査から算出し、それを国勢調査の壮年期人口に乗じて得られた出身地別壮年期人口から計算した単身者率を図に示している。男女とも東京圏外出身者の単身者率は東京圏内出身者よりも高い。これは東京圏外から東京都へ転入し、都心回帰に寄与する人口集団が、東京都全体の単身化を促進する効果を持っていることを意味している。東京都の壮年期単身者率自体が全国的に見て高い水準にあるため、東京圏外からの人口移動が全国の単身化率の上昇にも寄与している構造も想起される。



資料：国勢調査、人口移動調査
図：出身地別に見た東京都壮年期人口の男女別単身者率

2. 看護学部

定廣 和香子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

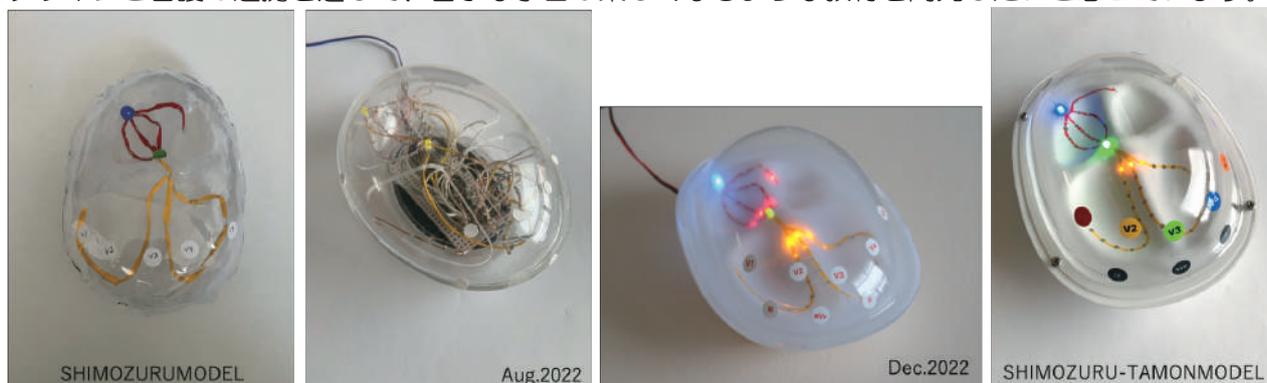
SADAHIRO Wakako

キーワード：教材開発、心電図学習、デザインと看護の連携

デザインと看護の連携による心電図学習教材（立体模型）の開発

【研究の概要】

卒業生下水流裕斗さん（北里大学病院）が発明した心電図学習教材を実用化するための共同研究をデザイン学部細谷多聞教授と行っています。心電図学習用の心臓模型 SHIMOZURU モデルは、2段階の改良プロセスを経て、SHIMOZURU-TAMON モデルに進化しました。現在、看護大学、看護専門学校の学生さんを対象に SHIMOZURU-TAMON モデルを評価するための研究を進めています。デザインと看護の連携を通して、苦手な学習が楽しくなるような教材を開発したいと思っています。



樋之津 淳子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

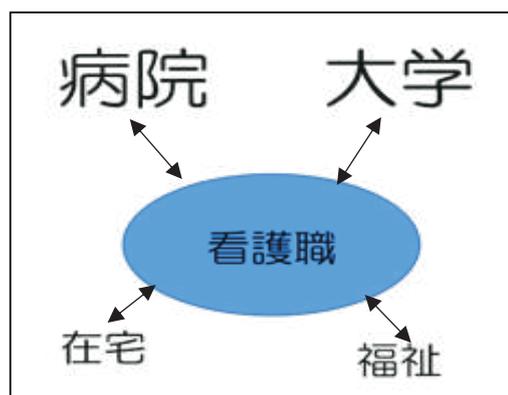
HINOTSU Atsuko

キーワード：継続教育、看護コンソーシアム、看護技術

大学と医療施設の協働による 看護師の遠隔会議システムを用いた継続教育の効果

【研究の概要】

看護系大学と医療施設が連携・協働して看護専門職者の人材育成やキャリア支援を行う共同体である、看護コンソーシアム活動に取り組んでいる。看護師が基礎教育を終えた後、さらにステップアップするために必要な研修を個々の所属施設で行うのではなく、大学の持つ人的、物理的リソースと複数の医療・福祉施設の連携・協働による横断的な取り組みが必要であると考えている。昨年度は COVID-19 への対策としてすべての研修を遠隔会議システムで実施した。遠隔研修への参加者は回を重ねていく中で双方向性のディスカッションがスムーズとなり、遠隔研修であっても研修効果が非常に高く、満足度も高いことがわかった。



檜山 明子

准教授 看護学部（基礎看護学領域）

HIYAMA Akiko

キーワード：転倒予防、リスクアセスメント、医療安全

転倒予防に関する研究

【研究の概要】

転倒は、病院や施設、在宅でも健康を損なうリスクにつながります。そのため、人々は、転倒しないこと、あるいは転倒してもけがをしないことを望みます。一方で、誰にとっても活動能力の維持向上が同時に望まれますが、活動性が高まれば、転倒リスクも高まります。転倒予防は相反する側面を持っているので、予防が困難であるという現状があります。

私は転倒予防のための看護技術を検討するために、認知行動の視点、運動力学的視点で転倒要因に関する検証を重ねています。転倒は、高齢者に限らず発生しますが、発生するまでの要因やプロセスは、年齢によって特徴があることがこれまでの研究からわかりました。私は、これらの転倒要因に関して、研究を重ねながら、看護師が修得可能な転倒予防技術としての確立を目指しています。



武富 貴久子

講師 看護学部（基礎看護学領域）

TAKETOMI Kikuko

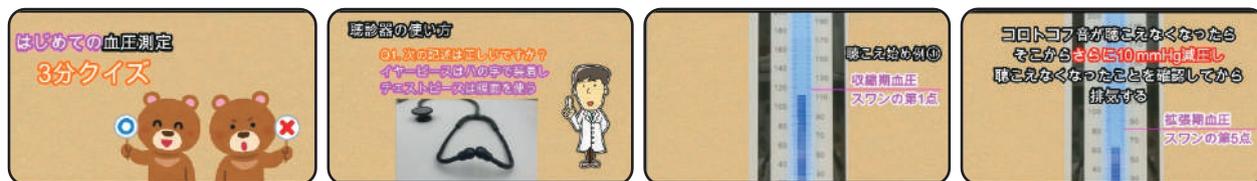
キーワード：看護技術、血圧測定、学習教材

血圧測定聴覚トレーニング教材 - はじめての血圧測定 3分クイズ -

【研究の概要】

血圧測定とは、圧迫により動脈内の血流を一旦遮断し、徐々に圧迫を解除すると心臓の拍動に合わせて生じる断続的な血流の音（コロトコフ音）を聴診器で聞き取る方法である。

血圧測定は看護学生が最初に習得する看護技術の一つである。しかし、多くの手順を正しく踏みながら、それまで聞いたことのない血流音を、聴診器から聞こえる音として聴覚で認識することは初学者にとって大変難しいことである。さらに、COVID-19 感染が拡大した状況において、学生同士で互いに測定しあう練習機会はほとんど失われた。そこで、いつでもどこでも繰り返し聞くことのできる血圧測定の聴覚トレーニング教材として、iPAX フィジカルアセスメント教育用クラウドシステムを活用して動画教材を試作した。本取り組みは、テレメディカ藤木氏との共同プロジェクトである。



三戸部 純子

講師 看護学部（基礎看護学領域）

MITOBE Junko

キーワード：ヒューマンエラー、医療安全、認知心理学

薬剤情報のエラー識別の正確性と指差呼称の効果

【研究の概要】

医療現場において、薬剤の取り違いや投与量の薬剤の取り違いや投与量の間違いといったエラーは、患者へ重大な影響を及ぼす恐れがあります。特に入院患者に対しては、看護師が直接薬剤を投与する場面が多く、エラー防止が重要となります。類似する薬剤名がエラーの要因となることはこれまでの様々な研究で明らかとなっています。しかし薬剤名だけでなく、数字と単位で構成される薬剤量や、1日何回何錠投与するかといった、他の薬剤情報についてなぜ見間違いや見逃しが生じるかといった点についてはあまり解明されていません。そこで、まず本研究では薬剤名や薬剤量が単独で示されているときと、これら2つの情報が組み合わされて示されるときに、エラーのしやすさに違いが生じるのかといったことを、パソコン上に課題を呈示して実験的に検討しています。

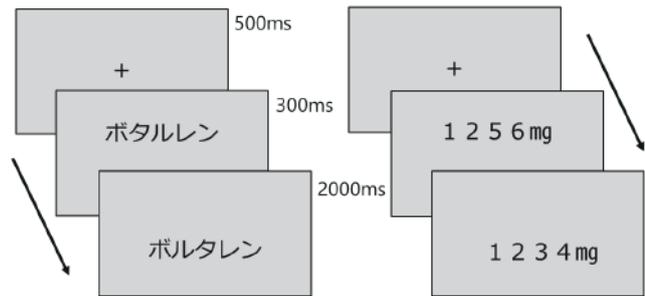


図. 実験刺激（例：薬剤情報を単独で呈示した場合）

山出 誓子

特任講師 看護学部（基礎看護学領域）

YAMADE Seiko

キーワード：看護チーム、チームワーク、一般病棟

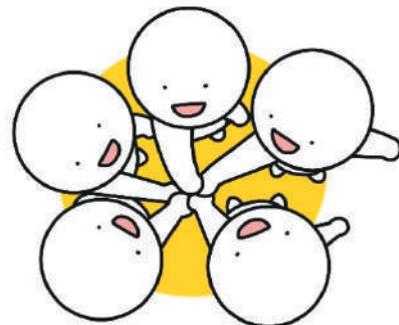
一般病棟における看護チーム活動に影響する要因

【研究の概要】

《目的》一般病棟の看護チーム活動に影響する要因を特定する。《方法》医中誌 Web にて質的研究デザインの日本国内の文献を検索した。PCC を用いて Participants を全ての看護師、Concept を看護チーム活動、看護師のチームワークに関するもの、Context を一般病棟と、スクリーニングと評価、マッピングを行った。《結果》検索した 522 件の内 10 件が対象となった。看護チーム活動に影響する要因は【相互理解が可能な関係性】【適正なリーダーシップの発揮】【支持的でポジティブな環境】【看護の目標達成のための協働】【自己の役割認識】【頼れる管理者の存在】に大別できた。

【相互理解が可能な関係性】は、仲間との繋がり、率直な意見交換等であった。【適正なリーダーシップの発揮】は、ケアの優先順位判断、メンバーの特性把握、柔軟な対応、公平なリーダーの存在であった。【支持的でポジティブな環境】は、支持的でユーモアがある雰囲気、学習環境であった。

【看護の目標達成のための協働】は、看護の意義の共有や調整であった。【自己の役割認識】は、周囲の状況把握と自己認識であった。【頼れる管理者の存在】は、看護管理者の理解と頼れる存在であった。



吉田 実和

助教 看護学部（基礎看護学領域）

YOSHIDA Miwa

キーワード：転倒・転落予防、看護チーム、チームアプローチ

看護師のチームアプローチに対する評価と 転倒・転落予防の実践状況に対する評価の関連について

【研究の概要】

転倒・転落は、加齢や疾病、運動機能障害などの人の内的な要因の他、薬剤や環境などの外的な要因が複雑に重なって発生する。そのため、病棟での転倒・転落予防は看護チームメンバーの連携や他職種との連携が不可欠である。そこで、病棟に勤務する看護師が、自身が所属する病棟のチームアプローチの状況と転倒・転落予防の実践状況を評価し、その関連を明らかにすることを目的に調査を行った。本研究では、転倒・転落予防の実践状況の評価が高いと、チームアプローチ実践状況の評価も高く、また、チームアプローチ実践状況の評価が高いと、転倒・転落予防の実践状況の評価が高い傾向があることがわかった。

*チームアプローチとは、チームメンバーである専門職が課題を達成するために主体的に関与し、協働・連携のもとに行われる支援活動のこと

佐藤 ひとみ

教授 看護学部（看護管理学領域）

SATOH Hitomi

キーワード：看護管理、人材育成、看護情報

看護管理と看護情報学

【研究の概要】

「看護管理学」は、個々の患者さんへ必要な看護を24時間滞りなく提供できる仕組みを研究する学問です。その延長線上に看護を提供する組織、人（看護職員）、物品や情報をどのようにマネジメントすると、患者中心の医療・看護を提供できるかということがあります。特に人（看護職）のマネジメントが重要で、看護職が生き生きと働き甲斐を持ち、能動的に成長できるよう環境を整えることが重要です。もう一つの研究分野である看護情報学は、カリキュラム改正で「ICTの活用」として位置付けられました。看護情報学はまだメジャーではありません。関連学会のメンバー数名とともに、モデルシラバスを作成するための調査を進めております。看護は、健康問題を持つ患者さんの生活に対し、その方の望む生き方が全うできるよう手助けする役割があります。看護師は患者さんを「知る」ことから開始し、身体の観察等で病状等を日々把握し、手助けする行動に結びつけるための判断をしています。一言で表現すると、この判断過程を「情報化」と言います。看護情報学は、この過程を電子化し、看護実践をより合理的に省力化できるようにすること、コンピュータに蓄えたデータを看護に役立てる方法を研究します。

鬼塚 美玲

講師 看護学部（看護管理学領域）

ONITSUKA Mirei

キーワード：人的資源管理、看護管理、災害看護、厳冬期災害、積雪寒冷地域

厳冬期地震災害時の災害看護活動に関する研究

【研究の概要】

日本の国土の約 6 割は積雪寒冷地域、約 5 割は豪雪地帯です。これらの地域で厳冬期に地震災害（積雪寒冷期大地震）が発生した場合、地震被害に加え、雪や寒冷環境による被害も発生するため、被害の拡大が想定されています。病院でも、人（患者、被災者、看護職など）や物（医療機器、薬剤など）が積雪・寒冷環境の影響を受け、様々なリスクに晒される可能性が考えられます。そこで、安全かつ最善な災害看護活動の実践を目指し、積雪寒冷期大地震時の災害看護活動に係るリスクの解明と、リスク対応の視点から必要な備えを明らかにすることを目的に研究に取り組んでいます。

その中の 1 つとして、災害急性期の病院で想定される看護職の健康リスクを明らかにしました。定性的方法でリスクを洗い出した結果、雪や寒冷環境の影響を受けるリスクとして「寒冷障害」「外傷・筋骨格系疾患」「季節性感染症」「尿路・婦人科系感染症」「脱水症」「雪眼炎」「一酸化炭素中毒」「疲弊状態」「ストレスの増大（危機的・基礎的・累積的）」「急性ストレス反応の出現」が抽出されました。地震災害時はライフラインの途絶や設備の損傷によって暖房が停止しやすく、雪や寒冷環境下での屋外避難等も想定されるため、防寒への備えは必須です。



矢野 祐美子

講師 看護学部（看護管理学領域）

YANO Yumiko

キーワード：看護管理者、継続学習、オンライン

看護管理者の継続学習支援

【研究の概要】

日本では少子高齢化を背景に、医療の機能分化と地域連携が促進され、看護管理者には自施設のみならず、地域全体の将来を見据えて各々の施設の果たす役割を再定義し、管理実践を行っていくことが求められている。看護管理者が効果的に役割を発揮するには、看護管理に必要な情報の取得と継続学習が不可欠である。しかし、看護管理者の継続教育や研修の機会は病院規模によって差があることが指摘されている。また、物理的距離が大きい地域における継続学習の機会には、都市部とは異なる困難が伴う。

そこで、病院規模や地域によらない看護管理者のための継続学習支援を構築することを目的に研究を行っている。都市から物理的距離が大きな地域に勤務する看護管理者にインタビューを行い、明らかになった継続学習の実態とニーズをもとに、看護師長を対象としたオンラインによる学習プログラムを構築した。300 床未満の中小規模病院に勤務する看護師長に学習プログラムに参加してもらい、その効果を評価した。



松浦 和代

教授 看護学部（小児看護学領域）

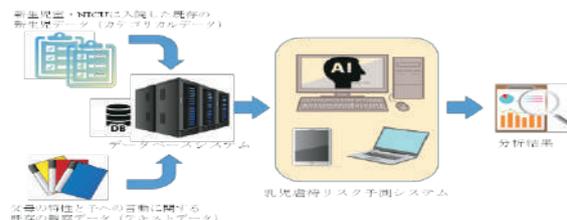
MATSUURA Kazuyo

キーワード：NICU、乳児虐待、リスク、予測システム

乳児虐待リスク予測システム（仮称）プロトタイプの開発

【研究の概要】

全国児童相談所が対応した子ども虐待対応件数は年々増加を続け、2020年度には20万件を超えたことが報告されています。また、2020年度に発生した子ども虐待の約70%は3歳未満でした（社会保障協議会児童部会虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会第17次報告、2021）。私達はNICUに収容された病歴をもつ赤ちゃんが子ども虐待ハイリスク要因を複数有している事実に着目し、乳児虐待リスク予防システム（仮称）の開発に取り組んでいます。北海道内のNICUを有する総合病院との共同研究を進めています。



赤ちゃんのNICU退院前に、本システムを用いて育児支援の必要な親御さんを発見し、適切な退院指導と地域フォローアップを提供することによって、乳児期の虐待（乳児虐待）を未然に防ぐことを目指しています。

牧田 靖子

講師 看護学部（小児看護学領域）

MAKITA Yasuko

キーワード：窒息、乳幼児、事故予防対策

乳幼児の「窒息・誤飲」事故の実態と事故予防対策

厚生労働省人口動態統計によると、わが国の14歳以下の死因では、「不慮の事故」が上位を占めています。「不慮の事故」の総数は減少してきているものの、「窒息・誤飲」事故は、乳幼児、特に0歳児に多く発生し、死亡あるいは重篤な障がいを残す場合があります。

乳幼児では、成長発達段階による興味・関心の対象の拡大、行動範囲の拡大、安全に対する意識の未熟性などによって、起こりやすい「窒息・誤飲」事故には特徴があることが報告されています。また、家庭や地域における事故予防指導、啓発等の対策も各自治体で実施されています。

しかし、「窒息・誤飲」事故の発生割合の減少は、十分とは言えないのが現状です。乳幼児の「窒息・誤飲」事故件数の減少、および、万が一「窒息・誤飲」事故が発生した場合に重篤な後遺症が残らないようにしたいということを目指し、研究にとりこんでいます。現在は、乳幼児の保護者、保育士に対する窒息解除技術の指導とともに、保護者が危険を回避した場面の分析から事故予防対策に繋げた研究をすすめています。



荒木 奈緒

教授 看護学部（母性看護学領域）

ARAKI Nao

キーワード：出生前遺伝学的検査、羊水検査、意思決定

妊婦の羊水検査に関する意思決定の様相

【研究の概要】羊水検査に関する意思決定は、検査の適応妊娠週数と人工妊娠中絶の可能な期間という時間的制限の中で、倫理的判断を迫られるという特徴がある。本研究は、妊婦の羊水検査に関する意思決定の状況を把握する事を目的とした。妊娠 22 週～26 週の妊婦を対象としアンケート用紙を配布し、郵送法にて回収し、87 名から有効な回答が得られ、以下のことが明らかになった。

1) 意思決定に際して妊婦にとって重要であった事は、検査の精度や安全性・検査結果・家族意見の尊重であった。

2) 検査に関する悩みは、検査を受けたかどうかに関らず、胎児への思いや人工妊娠中絶に対する自己の感情と葛藤であった。

3) 検査に関する情報内容は、検査の目的・方法・副作用が中心であり、疾患の知識や障害児の生活、公的支援に関する情報は極めて少なかった（図1）。

4) 検査を受けるか否かの結論を出すのが難しかった妊婦は、「夫支配型」次いで「自律型」の夫婦関係が多かった。

以上のことから、夫婦の関係性や夫婦各人の検査に対する認識を把握した上で、妊婦の主観や感情を受け止める必要がある。また、疾患や障害児育児に対する偏りの無い情報を提供することが看護援助として重要と考える。

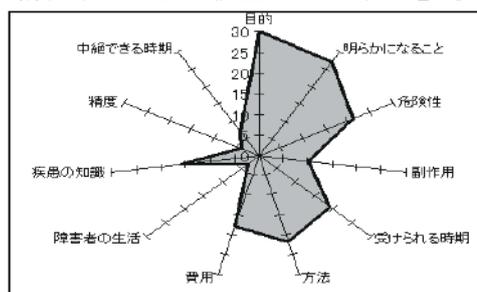


図1. 羊水検査に関する情報内容（複数回答）

石引 かずみ

講師 看護学部（母性看護学領域）

ISHBIKI Kazumi

キーワード：マタニティケアシステム、女性中心のケア、多職種連携

日本における母子と家族にとって 安心・安全・快適なマタニティケアシステムの構築を目指して

【研究の概要】

日本では、社会構造の変化、労働力不足、ハイリスク妊産婦の増加等、周産期医療を取り巻く環境はより複雑化し、課題が山積みの状況にあります。また、生活医療圏に出生する施設がない等、周産期医療体制は地域格差が大きい状況にあり、その整備は喫緊の課題です。

母子と家族にとって安全・安心・快適なマタニティケアシステムの構築のためには、多職種が協働すること（多職種連携）が必要であることが明らかになっています。そのため、わが国におけるよりよいマタニティケアシステムの構築を目的として、助産師と産科医師をはじめとした多職種連携に関する研究に取り組んでいます。

また、マタニティケアにおいて、「女性中心のケア」は中心的かつ大切な概念であり、国際指針として提言されています。「女性中心のケア」を目指した多職種連携が、日本で実現できることを目指しています。



岡 園代

OKA Sonoyo

講師 看護学部(母性看護学領域)

キーワード：新生児看護、ハイリスク新生児看護、
新生児集中ケア認定看護師、NICU

熟練した技の言語化

【研究の概要】

新生児集中治療室(NICU)では、生まれたばかりの新生児が何らかの健康障害を抱え、親もとから離れ治療を受けています。治療のみならず、成長を遂げる場でもあり、非常に繊細で緻密なケアを提供することが求められる高度な技術と判断を要する医療現場の一つです。

特に、超低出生体重児(出生時体重 1000g 未満)の生まれたばかりのケアは、生命危機を脱し、『後遺症なき生存』という目標を達成するために多岐に渡った急性期ケアを提供します。臨床では、経験が豊富な看護師に任されることが多い事例になります。

出生早期の短時間の中で、看護師がどのような判断を基にケアを選択し、実施(行動)しているのかをインタビューを通して、明らかにしたいと考えています。そのことにより、看護師の経験が言語化され、新生児の命を守るために必要な事柄や思考性が明らかになり、看護ケアの再現性を担保でき、地域や施設による差の解消に役立ち、質の均霑化にも寄与できるのではないかと考えています。



加速する少子化にあって、一人一人の大切なお子さんを助けるケアはもっと、重要になっていくと思います。現在、どのような手法や設問によって、話やすく、多くの事柄を語っていただけるインタビューになるのかを試験しながら、模索し、進めています。

黒田 紀子

KURODA Noriko

看護学部 講師 (母性看護学領域)

キーワード：新生児看護、NICU、在宅ケア

NICU から退院する赤ちゃんのご家族がより笑顔になるために

【研究の概要】

NICUに入院した赤ちゃんや家族がより笑顔になれるように、と願いながら研究をしています。

現在の研究は、NICUで入院している児の中でも人工呼吸器を装着している児の両親が、児を在宅で養育することに意思決定をした背景を明らかにすることを目的としました。児が人工呼吸器を家庭へ持ち帰る必要があった状態で退院した経験のある母親を対象に思いを聞きました。

結果、退院を決める意思決定には、児への愛情、医療者の支援、家族の一員として迎えたい思い、医療技術やケアに対する自信、ロールモデルとなる存在等、多様な因子が関連していることがわかりました。これらより、医療者としては児の入院先の関わりとして、情報提供や吸引などの医療手技の支援はもちろん、児を家族の一員として愛情をもてるような支援が重要であることが明らかになりました。

赤ちゃんやご家族がより自分たちらしい人生を歩むために、今後も支援の更なる充実が望まれると感じています。微力ながら私もそのお手伝いができるよう、日々努力してまいります。

山本 真由美

講師 看護学部（母性看護学領域）

YAMAMOTO Mayumi

キーワード：母性看護学、母性看護技術、モデルの開発

看護実践能力を向上させるための「装着型産褥子宮モデル」の教材開発

【研究の概要】母性看護学は女性の一生に関わる分野とされています。実習では、主に産後の母親と新生児に関わります。産後の母親が新生児に関わる際には、体調がよい状態でなければなりません。母親の体調を判断する一つとして、「子宮の戻り具合」を観察することが重要となります。これまでの子宮モデルは、置き型タイプ（写真1）のものしかなかったため、会話しながら看護技術を実施することができませんでした。そこで、身体に装着して「子宮の戻り具合」を観察するモデルを作ることで、学生の看護実践能力を向上させることを目的にモデル（試作：写真2・3、写真2を元に改良：写真4）を製作しました。



写真1：置き型タイプ

製作したモデルを使用したことで、①羞恥心に配慮しながら下腹部を露出することができる、②会話し、かつ母親の反応を見ながら看護技術を実施することができるという結果を得ました。さらに、このモデルを元に2022年4月に製品化（写真5）されました。



写真2：1回目作成

粘土で作成した子宮（左）と腹部（右）



写真3

写真2を着た様子



写真4：改良



写真5：株式会社高研 HP より

大友 舞

助教 看護学部（母性看護学領域）

OHTOMO Mai

キーワード：プレコンセプションケア、健康管理

プレコンセプションケアに関する研究

【研究の概要】

私は、「プレコンセプションケア」についての概念分析を進めています。プレコンセプションケアとは、妊娠前管理を指します。思春期前の子どもから性成熟期にある男女が、将来の妊娠や身体の変化に向けて、健康に関する正しい知識や習慣を身に着けるためのヘルスケアを行うことです。

日本は、妊娠後の医療やケア支援体制は、高水準にあります。先天的異常、児の未熟や母体合併症に伴う乳児死亡は減っておらず、これらの改善のためには妊娠前からの健康管理が大きな課題であると言われています。中でも、若い女性の低栄養やボディイメージの歪みからくるやせの増加によって、低出生体重児割合の増加、それに伴う子どもたちの長期的な健康課題への懸念があります。

このような課題を解決するために、自らの健康を管理し、生涯にわたって「質の高い生活」を送れるための支援を今後検討していきたいと思っています。



久保田 祥子

助教 看護学部（母性看護学領域）

KUBOTA Shoko

キーワード：性的同意、性暴力予防、性教育

日本における「性的同意」の実態把握

【研究の概要】

私は、日本において人々が「性的同意」についてどう考え実践しているか、その考え方や実践に関連・影響する因子は何かを調べ、性的同意の教育に役立てたいと考えています。

欧米、特に北米ではここ10年ほど、「性行為には自発的な、明確な、行為の段階ごとの同意が必要」といった教育が盛んに行われています。ただ、欧米での研究によると、多くの人は性的同意を「非言語的、暗示的」な行為で示し、解釈していることが分かっています。また、米国やスウェーデンの若者も、性行為のときに口頭で明確に同意を伝え合うことを「気まずい」「非現実的」と考えていることが示されています。このように、教育で伝えられる性的同意のあり方と、実際の性的同意との間には溝があり、教育を有効にするためには性的同意の複雑さ、曖昧さを把握し考慮する必要があることが指摘されています。

日本にはこの分野の研究が少なく、その実態がどのようなものか、学術的にはほとんど分かっていません。今後、インタビューやアンケート調査等を通して、少しずつ明らかにしていきたいと考えています。



川村 三希子

教授 看護学部（成人看護学領域）

KAWAMURA Mikiko

キーワード：認知症高齢がん患者、シミュレーション教育、疼痛マネジメント、がんサバイバー、ヘルスリテラシー

- ① 認知症高齢がん患者の痛みのマネジメントに対するシミュレーション教育プログラムの開発
- ② がんサバイバーのヘルスリテラシーに関する研究



- ① 認知症を伴う高齢がん患者さんに対する看護師の疼痛マネジメントの実践力を高めるためにシミュレーション教材（写真はその一部）を用いた教育プログラムを開発しました。また、教育効果を評価するための尺度を作成し、前後比較の調査を実施しました。結果、専門的知識の講義とリアリティのある教材を用いたグループワークにより一定の教育効果が得られることが明らかになりました。2023年度は教材をさらに洗練させ介入研究を行う予定です。
- ② 外見の変化を体験したがんサバイバー（体験者）のヘルスリテラシー（HL）のアンメットニーズ（満たされないニーズ）、HLの実態を明らかにしました。HLのアンメットニーズは、情報がみつけない、”人それぞれだから”と処理されてしまい、自分の欲しい情報にたどり着けないという特徴がありました。またHLの実態調査（n=181）では、情報が正しいかを評価したり自分で決めるために調べるといった“批判的HL”が低いことが明らかになりました。

卯野木 健

教授 看護学部（成人看護学領域）

UNOKI Takeshi

キーワード：集中治療室、集中治療後症候群、PICS、メンタルヘルス、認知機能障害

重症患者の長期的な後遺症に関する研究

【研究の概要】

私は重症患者が在宅に復帰したとき、どのような後遺症を持っているかに関心を持ち、調べています。今年度は食欲不振がどの程度生じているのかに関して調査しました。

高齢者に多く見られる食欲不振は、重大な問題であり、サルコペニアという病気と関連して死亡率が高くなることが知られています。しかし、集中治療室（ICU）退院後の食欲不振についての研究はほとんどありませんでした。そこで、ICU退院後12ヶ月後に在宅で生活する患者を対象に、食欲不振の状態やうつ病との関係について調べる研究が行われました。この研究では、日本国内の12のICUで行われた双方向研究（SMAP-HoPe研究）のデータを使用し、65歳以上の患者468名が分析されました。その結果、食欲不振の有病率は25.4%であり、うつ病の重症度が高いほど、食欲不振の確率が高くなることがわかりました。この研究は、集中治療から12ヶ月後に食欲不振がよく見られ、うつ病の重症度と関連があることを示しています。これらより、今後、重症患者の生活をフォローアップする上で食欲やうつ症状も重要であることがわかりました。



小田 和美

教授 看護学部（成人看護学領域）

ODA Kazumi

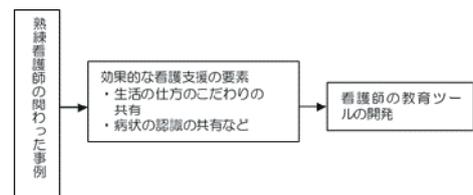
キーワード：慢性期看護、生活習慣病、患者教育、セルフケア支援、外来看護

生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な援助方法に関する研究

【研究の概要】

糖尿病や心疾患、脳血管疾患などの生活習慣病は、食生活や運動、喫煙などの生活習慣との関係が明らかとなっており、生活習慣を改善することにより、ある程度の予防ができます。そのため、生活習慣病を発症すると、人は生活習慣病と生涯とともに生きることになり、日々の食事や運動などの生活の仕方そのものが病気の治療・療養となり、病気の悪化に深く関係することになります。そこで、どのような支援がこのような生活習慣病とともに生きる人々のやる気を促して、長年の生活習慣を変える手助けになるのか、効果的な援助方法についての研究を継続的に行ってきました。

これまで、療養上の望ましい変化をもたらした看護師の関わりとして、看護師と患者さんが生活の仕方のこだわりや病状についての認識をお互いに共有することが重要であることがわかってきました。さらに、生活習慣病とともに生きる人々を生涯に渡って支援する看護支援方法を探求し、看護職のための教育ツールの開発に発展させていきたいと考えています。



菅原 美樹

准教授 看護学部（成人看護学領域）

SUGAWARA Miki

キーワード：看護師、コンピテンシー、評価指標

二次救急医療機関の救急外来看護師のコンピテンシー評価指標の開発

【研究の概要】

日本の救急医療を取り巻く現状では、増加する高齢の救急患者を含む様々な疾病や怪我を負った患者に対して、疾病の予防や継続ケアも含む全人的かつ包括的な医療の一端を担う役割が初期・二次救急医療に求められています。二次救急医療機関は、わが国の救急医療の重要な役割を担い、24時間365日、地域で発生する救急患者への初期診療を行い、必要に応じて入院治療を行っています。しかし、当番日には約70%の病院で1人の医師が担当しているなど、医師の処遇を含めた救急医療体制の改善が急務となっています。

こうした二次救急医療機関の診療体制を充実させる方略のひとつに、救急外来を担当する看護師に必要なコンピテンシーを明らかにした能力育成が重要になります。二次救急医療機関の救急外来に従事する看護師のコンピテンシー評価指標を開発し、教育に活用することを目指した研究をしています。



牧野 夏子

准教授 看護学部（成人看護学領域）

MAKINO Natsuko

キーワード：成人看護学、急性期看護学、救急看護、外傷看護、看護実践

看護師に対する外傷看護教育に関する調査

【研究の概要】

外傷とは、「機械的外力により身体の形態的・機能的な傷害を受けること」です。交通事故や転落などにより身体に衝撃を受けることで、なんらかの傷害をきたした状態を指します。

特に、重症な外傷の場合、適切な治療を受けなければ命が助からないことが多くあります。日本では、外傷を専門的に治療、看護する仕組みを整えているところです。そのような状況のなかで、看護師は様々な外傷患者に迅速に対応、ケアを行い、経験と学習を積み重ねています。しかし、外傷患者によって骨折や出血などの部位も異なることや、治療においては医療職者との協働・調整が不可欠であるため、多くの看護師が外傷看護に困難感を抱いていることが研究から明らかになりました。

そこで、私はまず看護師がどのような外傷看護教育を受けているのかを調査しました。次に看護師がどのような学習ニーズがあるのかを調査し、その結果から、看護師に対する外傷看護の教育方法について検討したいと考えています。

①看護師が学習している内容を書籍から調査

②看護師の教育機関における教育内容を調査

③看護師の外傷看護に関する学習ニーズ調査
-経験別に調査-

看護師の外傷看護に関する教育方法の検討

工藤 京子

講師 看護学部（成人看護学領域）

KUDO Kyoko

キーワード：患者会 難病、障害者

これからの患者会のあり方を考え支える

【研究の概要】

現在の日本には様々な疾患や難病の患者団体があり、始まりは結核やハンセン病の療養所といわれています。結成のきっかけは、同じ病気の人の経験を聞きたい、病気の辛さをわかり合える仲間が欲しい、病気の原因や治療法を知りたい、専門家を紹介してほしい、偏見を無くすため社会に働きかけたい等ということで、医療講演会や相談会、交流会、会報誌発行などの活動が行われています。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、これらの活動が妨げられ、オンライン講演会や交流会を実施したところもありましたが、高齢者や障害のある患者会には無理な状況でした。

このことから、今後の患者会について分析すると、急速にネット環境も進み、必要な情報が容易に手に入りやすくなり、離れた専門家ともつながれるということで、これまでの患者会の存在意義が問われてきていると思われました。そしてネットに強い若者などには患者会の必要性が感じられない可能性も示唆されました。しかし多様性を認めていく時代だからこそ、差別や偏見を無くす事は重要であるため、これからの新しい患者会のあり方、活動内容などについて、当事者ととも考えていく必要があります、そこに若者の介入があるとさらに発展していくと考えます。

栗原 知己

助教 看護学部（成人看護学領域）

KURIBARA Tomoki

キーワード：クリティカルケア、集中治療

集中治療室に入院する患者様の 入院中から社会復帰までを支える看護を考える

【研究の概要】

私の研究は、クリティカルケアと呼ばれる分野を対象にしています。クリティカルケアとは、生命の危機的状況にあり、主に集中治療室（ICU）と呼ばれる病室に入院する患者様を対象に行われる看護を指します。危機的状況にある患者様が安全に療養でき、早期の社会復帰を目指すことができる社会づくりに貢献するために、病院で働かれている看護師の方々の看護が少しでも向上するような研究成果を目指しています。

今は主に、様々なデータベースを使用し、そのデータを解析することで医療に貢献することを目指した研究に取り組んでいます。今後は AI と呼ばれる人工知能を活用した研究にも取り組みたいと計画しています。



平山 憲吾

助教 看護学部（成人看護学領域）

HIRAYAMA Kengo

キーワード：がん、がん薬物療法、有害事象、意思決定、生活の質（Quality of Life：QoL）、家族

- ① 高齢がん患者の薬物療法継続における意思決定に関する研究
- ② がん薬物療法を受ける高齢患者を支える家族の支援に関する研究

【研究の概要】

① 治癒が望めない進行がんを抱えた高齢がん患者は、薬物療法に伴う有害事象、加齢による諸臓器機能の低下などによって、いつまで治療を継続するのか葛藤を抱えている。高齢者の意思決定の特徴としては、医療者に「お任せ」する傾向があることが示されているが、お任せのまま受けることによって、QoLを維持した生活を送れなくなる可能性もある。そこで、進行期にある高齢がん患者が薬物療法の継続を選択するまでのプロセスに関する研究を進めている。さらに、意思決定に必要な医療従事者側の支援の実態を明らかにすることによって、進行期にある高齢がん患者の意思決定支援について検討していく。



② 高齢社会に伴い、がんの罹患および治療を受ける高齢のがん患者が増加している。多くの患者ががん薬物療法を受けているが、治療を継続するうえで周囲から受けるサポートは非常に重要である。しかしながら、高齢患者の家族、特に配偶者は患者を支える役目がある一方で、自らも高齢であり健康の悪化に対する不安を抱えていることが多い。そこで、がん薬物療法を受ける高齢患者の配偶者の体験を明らかにし、今後の家族支援の在り方について検討していく。

貝谷 敏子

教授 看護学部（老年看護学領域）

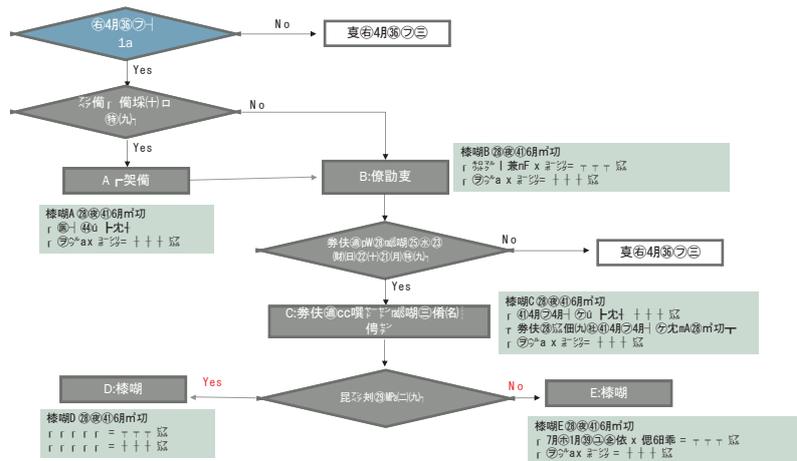
KAITANI Toshiko

キーワード：高齢看護学、スキンケア、看護政策・行政、医療経済学

高齢者の脆弱な皮膚に対する効率性の高いスキンケアマネジメント方法の構築

【研究の概要】

超高齢社会に伴い、脆弱な皮膚の特徴を持つ対象者が増えている。高齢者は、日常的な生活で生じるわずかな摩擦・ずれによって、皮膚が裂けてスキンケアといわれる損傷ができることがある。介護老人福祉施設の調査では、スキンケア保有者は平均 11.2 ± 20.5 人と施設間で差がみられた。スキンケアの予防に関する認識に差があることが示唆されている。特に介護施設等では、看護師と介護士がスキンケアを同様にアセスメントできることが必要であり、そのためには簡便に他の創傷と区別できることが必要である。今回は画像からスキンケアのアセスメントが可能なアプリを開発しており、これによりスキンケアの早期管理が可能となることを期待する。



図：アプリに使用するアルゴリズムの案

原井 美佳

准教授 看護学部（老年看護学領域）

HARAI Mika

キーワード：積雪寒冷地、過疎、高齢者、健康啓発プログラム

寒冷地に暮らしてきた高齢者の健康についての研究に取り組んでいます

【研究の概要】

老年期にある方が住み慣れた地域で暮らし続けていくための看護の手がかりを得たいという思いで研究に取り組んでいます。このうち 2016 年～2022 年度には、幌加内町の高齢者を対象とした多機関共同研究により、寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラム「いきいき健康塾」の構成要素を明らかにしました。特に、体組成の変化を把握し健康管理に活用可能な「いきいき健康手帳」（右図）を作成し、年度ごとの推移を可視化するシステムを併用しました。この手帳の各ページのモチーフは町の四季折々の風景となっており、また介護予防事業との連動を果たしています。このように町の高齢者の健康や町への思いを取り入れることで、同様の背景を持つ町においても実践可能な健康啓発プログラムとなり得たと考えています。

2023 年度からは、「いきいき健康塾」の実施主体を町へお渡しすることになりました。今後も、町の方々が住み慣れたわが町で暮らす一助となるよう、微力ながら貢献していきたいと思っております。



村松 真澄

准教授 看護学部（老年看護学領域）

MURAMATSU Masumi

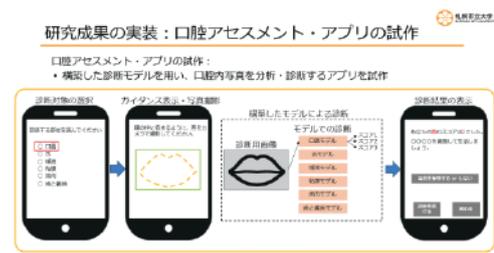
キーワード：口腔ケア、口腔アセスメント、AI、多職種連携

人工知能を利用した 高齢者の口腔アセスメントのスクリーニング構築の基礎研究

【研究の概要】

現在は、多職種連携で「人工知能（AI）」を使って高齢者の口腔内を Oral Assessment Guide (OAG) の項目の口唇、舌、唾液、歯肉、歯と義歯の口腔内画像を用い、OAG のスコアを診断する畳み込みニューラルネットワークを構築する」研究を実施しています。本研究の成果により、CNN による高齢者の口腔内の状態を OAG のスコアで評価できます。現在、研究を実装に載せるためのアプリ開発にも着手しました。

予想される結果としては、第一には歯科疾患の課題を持つ高齢者をスクリーニングができること、第二は、OAG のスコアが診断できればトータルスコアが出るので標準口腔ケアプロトコルで口腔ケアができること、第三は、口腔ケアプロトコルの評価を定期的実施して、その施設に最適な口腔ケアプロトコルを作ることができること、第四は、口腔ケアの評価が写真撮影だけでできることであり、看護介護職のみならず、家族や個人の活用も可能になることです。創造性としては、口腔の評価において AI を看護補助機能として使用することです。



伊東 健太郎

講師 看護学部（精神看護学領域）

ITO Kentaro

キーワード：北海道、過疎地域、精神障害者、支援

北海道の過疎地域における精神障害者を支援する際の困難

【研究の概要】

北海道の過疎地域における精神障害者（以下、当事者）支援について、当事者を取り巻く環境には、さまざまな課題が多い。

精神科医療機関の不足では、生活の近隣地域に医療機関がないことや、巡回診療が少ないこと、デイケアに通えないこと、精神症状悪化時の救急搬送の対応などの課題があった。社会資源の不足では、福祉サービスの不足や、住居の確保ができないこと、交通の不便さによる通院の困難、就労や就労支援の場がなく、当事者の治療や、自立した生活の支援を行う際に影響を及ぼすものと考えられる。人的資源の不足では、広域に居住する当事者の多くを一人で担当することや他職種の人的資源も少ないため、困難を感じているものと考えられる。当事者支援の難しさでは、疾患の特徴から、妄想の対象になることや、支援の効果がなかなか見えずらいこと、精神症状悪化時の対応が難しいため、対応に不安や負担を感じているものと考えられる。当事者の家族支援では、過疎地域の閉鎖的な環境や、家族が障害への差別や偏見を感じていることにより、支援を拒否することがあるため、支援を行うにあたり、十分に配慮して支援を行う必要がある。



渋谷 友紀

助教 看護学部（精神看護学領域）

SHIBUYA Yuki

キーワード：看護基礎教育、精神看護学、シミュレーション教育

当事者参加型演習：リカバリーの視点で当事者を捉える

【研究の概要】

2019年度より精神看護学領域では、精神障害者（以下、当事者）を招聘した当事者参加型演習をシチュエーション・ベースド・トレーニングとして位置付け実施してきた。この演習では、学生が精神に障害を抱えて地域で生活する当事者をリカバリーの視点で捉えることを目標としている。

リカバリーには

- ① 他者とのつながり
- ② 将来への希望と楽観
- ③ アイデンティティ・自分らしさ
- ④ 生活の意義・人生の意味
- ⑤ エンパワメントなど

多様な要素が含まれている。

また、リカバリーは、当事者自身が歩むものであり、当事者の自分らしさや人生の意味、将来への希望、生活の意義や他者とのつながりである。当事者参加型演習の教育効果を明らかにし、より効果的な教育実践につなげたい。



菊地 ひろみ

教授 看護学部（在宅看護学領域）

KIKUCHI Hiromi

キーワード：訪問看護、新卒ナース、採用・育成

明日の在宅看護を担う新卒訪問ナース育成の取り組み

【研究の概要】

これからの在宅看護を担う新卒訪問ナースの育成に向けて、道内7つの大学の在宅教員13名で「新人訪問ナースを応援する会（愛称：スタタン）」の活動をしています。新卒訪問ナース採用・育成に関する調査研究、新人訪問ナースの仲間づくり、新卒訪問ナースを採用した訪問看護ステーションへのサポートを行い、毎年1回「新人訪問ナース応援フォーラム」を開催しています。

今年のフォーラムでは、新卒訪問ナースの体験談、新卒ナースを採用している訪問看護ステーション管理者への質問コーナーなど多彩なプログラムで、アンケートの結果も大変好評でした。

新人訪問ナースが輝くために大学と訪問看護ステーションが連携を強めていくことが重要と考えています。



高橋 奈美

准教授 看護学部（在宅看護学領域）

TAKAHASHI Nami

キーワード：在宅看護学、難病看護、慢性疾患看護、高度実践看護、在宅移行支援

住み慣れた自宅で自分らしい生活を継続するための支援システムの構築

【研究の概要】

私が専門にしている在宅看護では、病気を持ちながらも住み慣れた自宅で安心・安全に療養できるための看護の方法や環境づくり、システムづくりに関する研究を行っています。現在は、特に、患者さんへの支援を考えるとともに、患者さんを支える家族への支援も大切に考え研究に取り組んでいます。

時代とともに、様々なサービスが整備され利用しやすくなってはいるものの、居住地域によって利用できるサービスの量、質は様々です。また、子育て世代の方が病気になったり、介護役割を若い年齢の子どもが担わなくてはならないなど、様々な状況に即した支援を検討することが重要です。

住み慣れた自宅で安心・安全に療養を継続するために、患者さん、そしてご家族をとともにケアすることが重要です。多様な病気や生活の状況を踏まえながら、どのような支援があると良いのか、患者さん、ご家族、専門職とともに検討しています。

坂本 結城

助教 看護学部（在宅看護学領域）

SAKAMOTO Yuki

キーワード：生活、概念分析、看護基礎教育

看護学における「生活」概念の明確化

【研究の概要】

看護職は「医療」と「生活」両方の視点を持って人を見る専門職です。

看護基礎教育において「医療」の視点については体系的に学びますが、一方で「生活」の視点については学問的知識として体系的に学ぶ機会がほとんどなく、学生が経験的に理解している日常用語としての「生活」をもとに授業が進んでいく現状があります。看護職も個々の知識と経験をもとに「生活」支援を実践しており、看護学における「生活」概念は明確であるとは言えません。そのため、看護学における生活概念や生活構造を明確にすることを目的とし、看護関連分野における生活の定義を導出しました。今後はこの定義をもとに、看護職個々に形成されている「生活」概念を可視化する研究をしたいと思っています。



看護職が観る「生活」って何だろう？

喜多 歳子

教授 看護学部（地域看護学領域）

KITA Toshiko

キーワード：子ども、貧困、保健師、支援体系

子どものいる貧困世帯に関する保健師の支援の質向上を目指して

【研究の概要】

保健師は、個人や集団、地域社会の健康と QOL 向上を目的に、主に行政組織で活動しています。

子どものいる貧困世帯に対する支援は、福祉的支援が強調されていますが、疾病や傷害リスクが高く健康面からの支援も求められています。しかしながら、従来の健康にのみ焦点化した保健指導の手法では、実効性に乏しく効果的とはいえないものがあります。近年、福祉部門への保健師の配置が進められてはいますが、保健と福祉を縦横に横断させた支援方法のノウハウは確立していません。

そこで、子どものいる貧困世帯への支援方法を体系化する必要があると考えました。そこには、個別支援のみならず、子どもの貧困を支える地域づくりまで含めることが保健師本来の活動になります。

体系化に向けて、まず、経験が豊富な保健師からの聞き取り調査で得られたデータを基に、具体的にどのような支援を行っているのかを類型化し、有識者からの聞き取り調査により不足している支援項目を追加し、最終的に現任保健師による実装に向けた検証を行う予定です。

また、保健師活動を支える組織体制が支援の質の保障を左右することが明らかになっており、組織の体制整備に関する活動についても言及していきたいと考えています。

本田 光

准教授 看護学部（地域看護学領域）

HONDA Hikaru

キーワード：ソーシャルサポート、社会的孤立、地域とのつながり

あらゆる世代における“地域とのつながり”

【研究の概要】

社会的孤立は公衆衛生の分野において、各国で研究が重ねられており、今や世界的な関心事の一つになっています。例えばイギリスでは孤独担当相が任命され、国策としてこの問題に向き合っています。社会的孤立は、精神的な抑うつ症状だけでなく、循環器疾患や高齢者のフレイルの進行にも影響があることが報告されています。また孤立の問題は、高齢者だけの問題ではなく、就学児童・生徒や成人期にある人々においても課題となっており、国際的にはホットな話題です。私は、この孤立の問題を「地域とのつながり」をキーワードにして、子育て、高齢者の見守りなどの地域課題に研究成果を応用したいと考えています。

↓開発したアプリのイメージキャラクターです。



市戸 優人

助教 看護学部（地域看護学領域）

ICHINOHE Yuto

キーワード：性教育、教材開発、特別支援教育

特別支援教育で活用可能な性教育教材の開発と有用性・有効性の検証

【研究の概要】

知的障害などがある子どもは、状況を適切に理解した上で行動化することが難しいことから、性トラブルに遭うリスクが高く、社会的な問題となっています。障がいのある子どもが、安全かつ健康的な生活を送るためには、性教育が重要とされていますが、性教育に苦慮する現場の教諭は多く、教材や資料が少ないことが課題の一つとされています。

そこで、ユニバーサルデザインの観点を取り入れた特別支援教育で活用可能な性教育教材を開発しました（右写真）。この教材は、障害の有無に関わらず、子ども同士が話し合いながら、楽しく性について学習できる教材となっています。教材開発は、特別支援学校と放課後等デイサービスの職員を対象に調査を行い、性に関連する子どもの特徴的な行動を明らかにし、得られた結果を教材の内容に反映させることで、実態に即した教材内容としました。

現在、教材の一般化に向けて、有効性と有用性の検証を行う研究に取り組んでいます。



近藤 圭子

助教 看護学部（地域看護学領域）

KONDO Keiko

キーワード：高齢者の健康、自己効力感、地域医療、健康行動

地域在住高齢者の健康に関する研究

【研究の概要】

高齢者の健康を保つことや、高齢者が自立した生活を送ることは、極めて重要な課題であり、豊かな生活を送り続けるためにも重要と考える。高齢者ができるだけ介護を必要とすることなく、自立した生活を送るためには、高齢者自身が健康に対する意識づけを高めることや、良い生活習慣の保持が重要である。そこで、高齢者の自己効力感、健康行動への意識、その人が自分らしく最期を迎えるためのアドバンスド・ケアプランニング(ACP)についても研究を進めている。また、北海道は都市部と過疎地では医療の偏在が大きいため、地域医療の問題についても研究を進めており、地域医療の住民意識の実態把握や住民理解のためのアプローチ方法についての検討にも取り組んでいる。



田仲 里江

助教 看護学部（地域看護学領域）

TANAKA Rie

キーワード：遺族ケア、保健師

大規模災害時等の遺族ケアにおける保健師の役割

【研究の概要】

日本での遺族へのケア、とりわけ大規模災害などの予期せぬ出来事で大切な家族を失った遺族への看護実践は、今後の課題であると考えています。しかし、日本では自然災害が多発しているにも関わらず、災害による遺族への支援は始まったばかりです。中長期的な遺族の心理的变化の実態について、十分な経験と知見が蓄積されているとは言い難い状況です。

そこで、これまで遺族ケアを行ってきた DMORT（災害死亡者家族支援チーム）、法医学者、および、遺族にとって身近な行政担当者への調査から、災害遺族への支援における看護職や保健師の役割を明らかにすることで、遺族へのケアの隙間を埋める必要があると考えています。また、今後も自然災害は避けられないだろうという予測から、災害後の遺族へのケアが必要であると考えています。特に市町村保健師による継続的な遺族へのケアについて検討していきたいです。

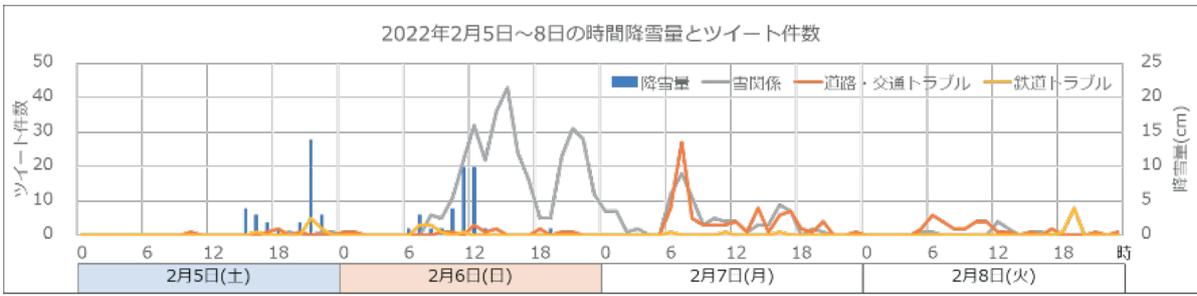
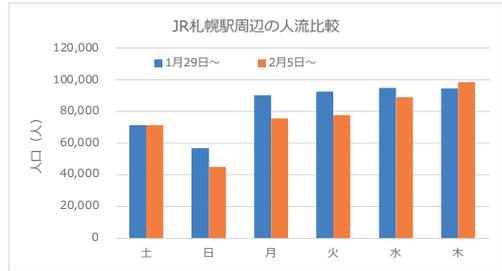


3. AIT センター

高橋 尚人 教授 AIT センター (情報学)
 TAKAHASHI Naoto キーワード：ビッグデータ、人流データ、SNS データ、大雪、影響分析

2022 年 2 月の札幌圏での大雪時の Twitter データおよび人流データ分析

【研究の概要】2022 年 2 月 5 日～6 日に、札幌都市圏で 24 時間降雪量が 60cm を記録する大雪があった。本研究では、SNS (Twitter) に投稿された大雪関連の投稿データおよび人流データを用い、大雪の影響を分析した。2 月 6 日の朝から雪関係のツイートが増え、午後には 1 時間あたり 40 件を超えるツイートがあった。道路・交通トラブルに関するツイートは、2 月 7 日 (月) 午前 7 時台に集中した。また、JR 札幌駅周辺の人流は、2 月 6 日～8 日は前週の約 8 割で、2 月 10 日に前週並みの人流に回復した。



札幌市立大学 教員研究紹介 2023

編集 札幌市立大学地域連携研究センター

発行日 2023（令和5）年7月10日

発行 札幌市立大学地域連携研究センター

〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目

TEL.011-592-2346

FAX.011-592-2369

<https://www.scu.ac.jp>

E-mail:crc@scu.ac.jp